

**鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報
25**

平成21年度

鹿児島大学埋蔵文化財調査室

2011年3月

序

鹿児島大学キャンパスには、後期旧石器時代から近代までの、貴重な遺跡が包蔵されていることが、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって明らかにされています。その成果は、これまでに『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』Vol.1～24、『鹿児島大学埋蔵文化財調査室発掘調査報告書』第1～5集として逐次報告されてきました。

今回は、鹿児島大学埋蔵文化財調査室の平成21年度の事業報告として『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』25を刊行することになります。

平成21年度は、発掘調査3件、試掘調査1件、立会調査16件、その他の事業5件を実施しました。本年次報告には、それらの概要等が掲載されています。

現在、キャンパス内では、多くの建物の建築や周辺整備などが行われ、それに先立って必要な埋蔵文化財調査が行われています。学内施設整備が円滑に進むよう、埋蔵文化財調査室は全力を尽くしております。そのほかにも、大学キャンパス内から出土する貴重な大学の財産、県民・国民の財産としての埋蔵文化財の調査および研究を行うための体制の実現について、重ねて全学的なご理解、ご支援をお願い申し上げます。

平成23年3月

鹿児島大学埋蔵文化財調査 室長
鹿児島大学埋蔵文化財調査委員長

新田 栄治

例言

1. 本報告は，鹿児島大学構埋蔵文化財調査室が，平成 21（2009）年度に行なった事業の年次報告である。
2. 本書に掲載している発掘・試掘調査は，鹿児島大学埋蔵文化財調査室が担当した。立会調査は，鹿児島市教育委員会が担当し，鹿児島大学埋蔵文化財調査室が補助した。
3. 本書の作成にあたっては，埋蔵文化財調査室が行なった。担当者は以下の通りである。

実測（新里貴之・東 友子） 製図（新里・篠原美智子） 作表（新里） 執筆（新里）
写真（新里）

編集（新里・中村・寒川）

4. 本報告の出土遺物について，須恵器・土師器は中村和美氏（鹿児島県教育委員会）の，ガラス瓶については庄司太一氏（ボトルシアター <http://bottle.cafesaya.net/>）の，近現代磁器の一部については，独立行政法人工業所有権情報・研修館よりご指導・ご教示を賜った。
5. 発掘調査による遺物の保管は，埋蔵文化財調査室の管理のもと，各学部，部局が収蔵している。また，図面・写真などの資料は埋蔵文化財調査室に保管している。

凡例

- 1 昭和 60 年 6 月 1 日の埋蔵文化財調査室の設置を機として、鹿児島大学構内におけるこれからの埋蔵文化財調査室に便であるように、鹿児島大学構内座標を郡元団地と桜ヶ丘団地（旧宇宿団地）とに設定した。その設置基準は、以下の通りである。
 - (1) 郡元団地では、国土座標第 2 座標系 ($X = -158.200$, $Y = -42.400$) を基点として一辺 50m の方形地区割りを行なった (Fig.1 参照)。
 - (2) 桜ヶ丘団地では、国土座標第 2 座標系 ($X = -161.600$, $Y = -44.400$) を基点として一辺 50 m の方形地区割りを行なった (Fig.2 参照)。
- 2 本年報におけるレベル高は、すべて海拔を表し、方位は真北方向を示す。
- 3 観察表等で使用した土器の編年観については、弥生時代を中園聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究』第 9 号, 古墳時代を中村直子 1987 「成川式土器再考」『鹿大考古』第 6 号に拠った。現代遺物の一部は桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』六一書房を参照した。
- 4 土層・遺物の色調は『新版標準土色帖』（農林水産技術会議事務局監修）を使用した。この色調に当てはまらないものについては「～に類似」、あるいは一般的な色調で表記した。
- 5 遺物に関しては観察表を作成した。その標記中、復元によるサイズは、（ ）をつけた。
- 6 本文中の遺物番号は、挿図、図版、遺物観察表と一致している。
- 7 挿図・表・写真は通し番号を付す。

目次

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則	1
鹿児島大学埋蔵文化財調査室規則	2
I 平成 21（2009）年度の事業概要	4
II 発掘調査の概要	7
2009-1 郡元団地 Q・R-8・9 区（附属中学校増築・改修工事）発掘調査	
2009-2 郡元団地 J-5 区（共通教育棟樹木移植工事）発掘調査	
III 試掘調査	
2009-3 郡元団地 H・I-5・6 区（玉利池周辺整備工事）試掘調査	15
IV 立会調査	17
V 遺物整理	34
VI 刊行物	34
VII 遺物保管	34
VIII その他の事業	35
1 公開講座	
2 博物館実習受入	
3 農学部開学 100 周年記念事業	
4 新制国立鹿児島大学 60 周年事業	
5 遺物資料貸出	
IX 平成 18～21（2006～2009）年度における自己評価報告	37

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会規則

(趣旨)

第1条 この規則は、国立大学法人鹿児島大学常置委員会規則（平成16年4月1日制定）第3条第3項に基づき、国立大学法人鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という）に関し、必要な事項を定める。

(組織)

第2条 委員会は、次に掲げる委員をもって組織する。

- (1) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室長（以下「調査室長」という）。
- (2) 各学部の教授、准教授又は講師のうちから選出された者各1名。

2 前項第2号の委員の任期は、2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする（審議事項）。

第3条 委員会は、次に掲げる事項について審議する。

- (1) 調査実施計画に関すること。
- (2) 埋蔵文化財調査室の予算に関すること。
- (3) その他埋蔵文化財の業務に関すること。

(委員長)

第4条 委員会に委員長を置き、第2条第1項第1号をもって充てる。

- 2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。
- 3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名した委員がその職務を代行する。

(議事)

第5条 委員長は、委員の過半数の出席をもって成立し、議事は、出席委員の過半数をもって決し、可否同数の場合は、議長の決するところによる。

(委員以外の者の出席)

第6条 委員会が必要と認めるときは、委員以外の者を出席させ、意見を聴くことができる。

(事務)

第7条 委員会に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

鹿児島大学埋蔵文化財調査室規則

(趣旨)

第1条 この規則は、鹿児島大学学則（平成16年4月1日制定）第7条第2項の規定に基づき、鹿児島大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という）に関し、必要な事項を定める。

(目的)

第2条 調査室は、鹿児島大学（以下「本学」という）の埋蔵文化財の調査に関する業務を行い、本学内に存在する埋蔵文化財の保護対策を講ずることを目的とする。

(業務)

第3条 調査室は、次の業務を行う。

- (1) 調査実施計画の立案
- (2) 発掘調査、分布調査および確認調査
- (3) 調査報告書の作成
- (4) その他必要な事項

(職員)

第4条 調査室に、次の職員を置く。

- (1) 調査室長（以下、「室長」という）
- (2) 主任
- (3) その他必要な職員

第5条 室長は、本学の考古学に関連する教員の中から国立大学法人鹿児島大学学内共同研究施設等人事委員会（以下「委員会」という）が推薦し、学長が選考する。

- 2 室長は、調査室の業務を掌理する。
- 3 室長の任期は2年とし、再任を妨げない。
- 4 室長に欠員を生じた場合の補欠の室長の任期は、前任者の残任期間とする。

(主任等)

第6条 主任は、調査室の職員の中から、特に埋蔵文化財に関する専門知識を有する者を委員会が推薦し、学長が選考する。

- 2 主任は、室長の命を受けて調査室の業務を処理する。
- 3 職員は、調査室の業務に従事する。

(事務)

第7条 調査室に関する事務は、施設部企画課において処理する。

(雑則)

第8条 この規則に定めるもののほか、調査室に関し必要な事項は、別に定める。

附則

- 1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初の室長は学長が指名した者をこの規則により選考したものとみなす。

鹿児島大学埋蔵文化財調査委員会（平成 21 年 4 月 1 日現在）

委員長 新田栄治（埋蔵文化財調査室 室長）
委員 本田道輝（法文学部）
日隈正守（教育学部）
稲田浩一（理学部）
築瀬 誠（医学部）
山崎要一（歯学部）
筒井俊雄（工学部）
南 雄二（農学部）
佐野正昭（水産学部）
山崎要一（大学院医歯学総合研究科）

鹿児島大学埋蔵文化財調査室（平成 21 年 4 月 1 日現在）

室長（併）	法文学部教授	新田栄治
主任	准教授	中村直子
	助教	新里貴之
	特任助教	寒川朋枝
技術補佐員		篠原美智子
		福永美保子

I 平成 21 (2009) 年度の事業概要

平成 21 (2009) 年度は、発掘調査 4 件、試掘調査 1 件、立会調査 16 件を実施した (Tab.1)。遺物整理作業は 8 件、刊行物として、発掘調査報告書第 5 集、年報 24 を刊行した。そのほか、遺物保管作業 3 件、公開講座 1 件等を実施した。発掘調査については、調査後に鹿児島県教育委員会に提出した概要報告書を掲載する。ただし 2009-4 桜ヶ丘団地新病棟建設工事については、調査期間として平成 22 (2010) 年度が主であるので、来年度刊行の年報にゆずる。試掘調査、立会調査の詳細、その他の事業に関しては、II 章以下に記す。

Tab.1 平成 21 (2009) 年度事業一覧

事業	コード名	調査区	工事名称	担当者		期間
				市教委	調査室	
発掘	2009-1	郡元 Q・R-8・9	附属中学校増築・改修工事	新里		2009年5月25日～7月7日
発掘	2009-2	郡元 J-5	共通教育棟樹木移植工事	中村		2009年5月25日～7月13日
試掘	2009-3	郡元 H・I-5・6	玉利池周辺整備工事	新里		2009年7月6・7日
発掘	2009-4	桜ヶ丘 D・E-6・7	新病棟建設工事	中村		2010年3月11日～2011年1月19日
事業	コード名	調査区	工事名称	担当者		期間
				市教委	調査室	
立会	2009-A	郡元 H～L-7～13	稲盛通り道路改修その他工事	永野	中村・新里	2009年6月1・2日
	2009-B	郡元 H-9,J-8,O-5	キャンパス情報ネットワーク設備工事	有川	中村	2009年5月7日
	2009-C	郡元 M～O-8～11	陸上競技場改修工事	有川	中村・寒川・新里	2009年4月15・20～22日
	2009-D	郡元 K・L-7・8	共通教育棟3号館改修その他工事	岩戸	中村・新里	2009年11月19日, 2010年2月12・17日
	2009-E	桜ヶ丘 H-8・9	教育研究棟新営工事	岩戸	寒川	2009年12月22日, 2010年3月8日
	2009-F	郡元 K・L-3～5	法文学部1号館改修(II期)その他工事	岩戸	中村	2009年9月1・8日
	2009-G	郡元 L-10・11	工学部管理棟改修工事	岩戸	中村	2009年12月24日, 2010年3月1・2日
	2009-I	郡元 Q・R-9	附属中学校(II期)その他電気設備工事	岩戸	寒川	2009年11月25日
	2009-J	郡元 I-5	大会館1号館空調電源設備工事	藤井	中村	2010年1月18日
	2009-K	郡元 H-8	中央食堂他通信線路改修工事	岩戸	寒川	2010年1月6日
	2009-L	郡元 I・J-10・11	応用化学工学科1号棟改修その他工事	岩戸	中村	2010年3月2日
	2009-M	郡元 G・H-8	ボイラー棟等とりこわし工事	岩戸	中村	2010年3月2日
	2009-N	郡元 K・L-7・8	共通教育棟3号館改修その他工事(追加)	赤井・藤井	新里	2010年1月12・19日
	2009-O	桜ヶ丘 F・G-9・10	外灯設備工事	岩戸	中村	2010年2月18日
	2009-P	郡元 K-11	外灯設備工事		中村	2010年2月17日
	2009-Q	郡元 G-5	ボイラー棟等とりこわし工事(追加)	赤井	寒川	2010年3月17日
事業	コード名	内容	事業	担当者		
遺物整理	2005-4	郡元	実測・トレース	新里・篠原・福永		
	2006-2	郡元	実測・トレース	新里・篠原・福永		
	2006-4	郡元	農学部 PFI 事業関係発掘調査	実測・トレース	新里・篠原・福永	
	2007-4	郡元	実測・トレース	新里・篠原・福永		
	1975-1	郡元	釘田第1地点発掘調査	実測	寒川・篠原・福永	
	2008-A～N	郡元・桜ヶ丘	2008年度立会調査	洗浄・注記・実測・トレース	中村	
	2009-C	郡元	2009年度立会調査	洗浄・注記	中村	
2007-2	郡元	共通教育棟改修工事に伴う発掘調査	洗浄	中村		
事業	内容	担当者	発行			
刊行物	報告書	鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第5集	新里・中村・寒川	2010年3月		
	年報	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 24	中村・新里・寒川	2010年3月		
事業	内容	担当者	期間			
遺物保管	遺物収蔵状況確認	10か所	中村・新里・寒川	2009年4月14日		
	収蔵場所移動	理工：共通棟→理工：プレハブ	中村・新里・寒川・篠原・福永	2009年5月10～11日		
	木製品保管水槽の水かえ	2か所	中村	2010年2月22～25日		
事業	内容	担当者	期間			
その他	公開講座『原始古代の南島墓』	「種子島小浜遺跡発掘調査報告」, 「徳之島トマチン遺跡について」	中村・新里	2009年8月8日		
	博物館実習受け入れ	大学院生2名, 学生3名	中村	2009年8月24日～9月4日		
	農学部開学100周年事業	配布パンフレット「地中からみた農学部の歩み」作成, 農学部敷地内出土遺物展示	新里・寒川・中村	2009年11月14～16・21～23日		
	新制国立鹿児島大学60周年記念事業	鹿大ジャーナルNo.182にて調査室と出土遺物紹介, 中央図書館出土遺物展示	寒川・中村	2009年11月24日		
	遺物資料貸出	黎明館企画特別展：古墳時代土器4点 宮崎県立博物館国際交流展：勾玉3点	中村・新里 中村	2009年9月1日～11月20日 2009年10月9日～12月13日		

I 平成 21(2009) 年度の事業概要

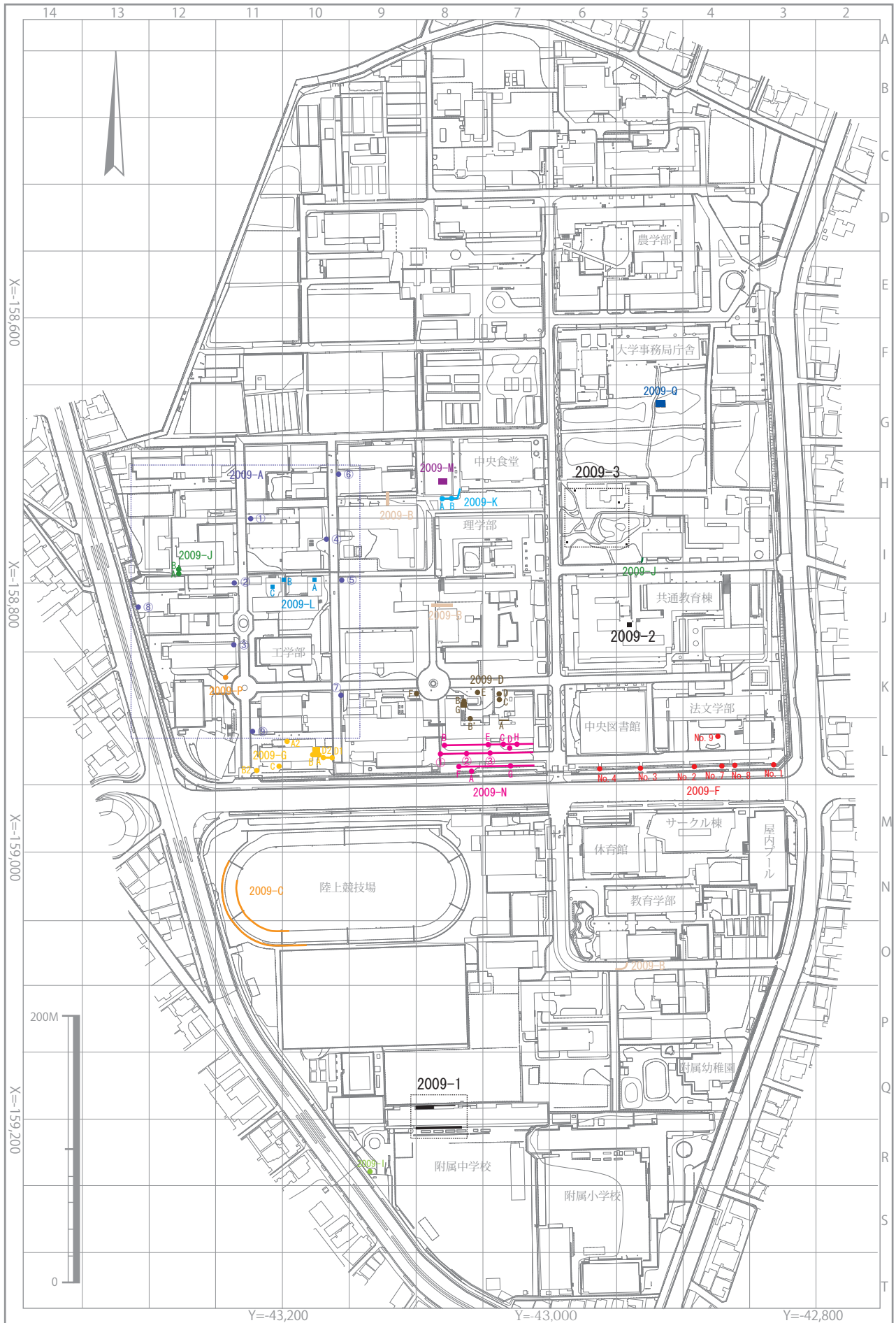


Fig.1 鹿児島大学構内遺跡郡元団地 (1/4000)

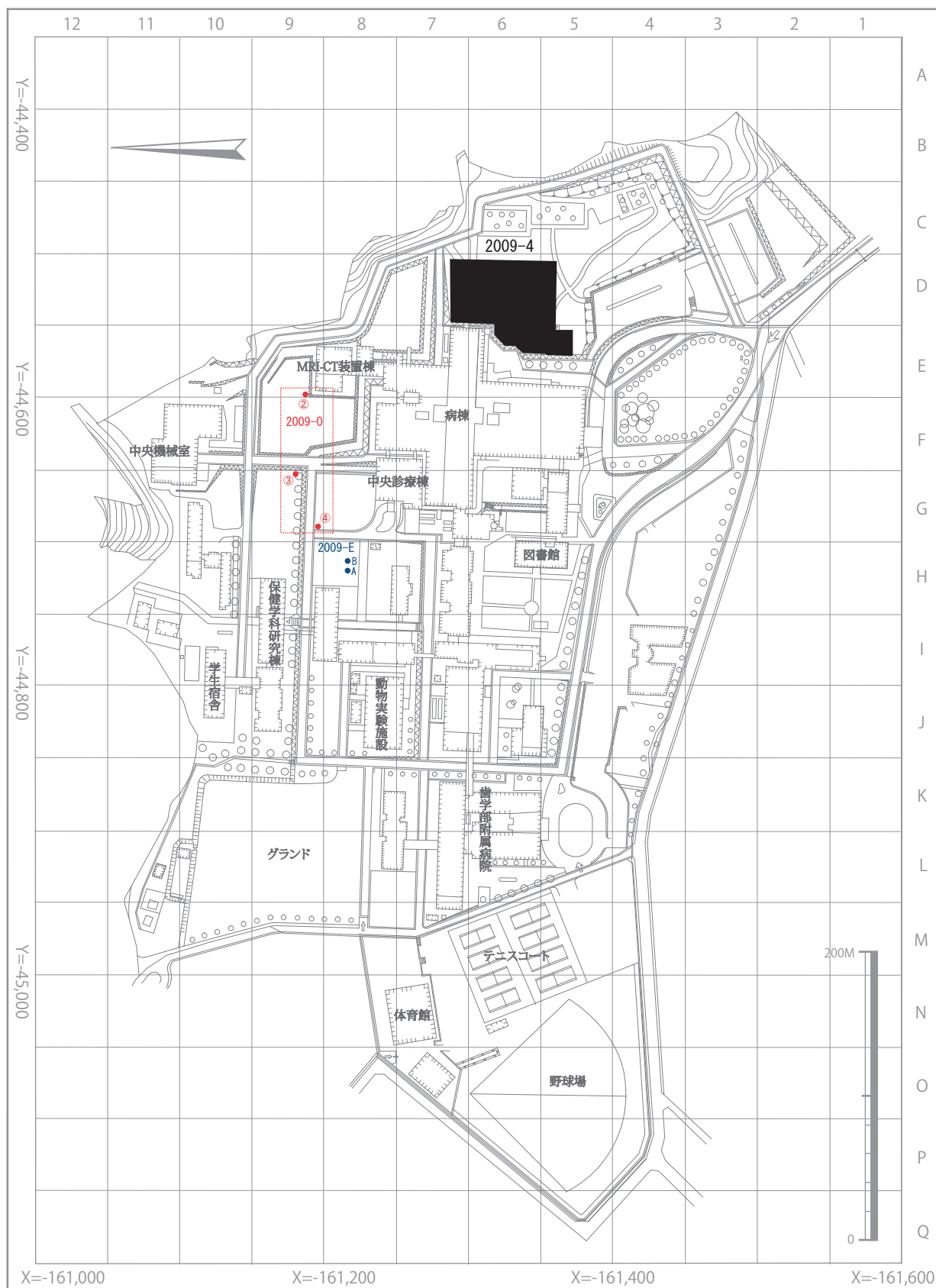


Fig.2 鹿児島大学構内遺跡桜ヶ丘団地 (1/4000)

II 発掘調査の概要

ここでは、平成 21（2009）年度に行なわれた発掘調査 2 件の概要報告を掲載する。鹿児島県に提出したものに一部加筆・修正を行ない、編集し直している。

2009-1 郡元団地 Q・R-8・9 区（附属中学校増築・改修工事）発掘調査

1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地の教育学部附属中学校内において校舎増築・改修工事が予定された（図 1・2）。同地点の西側には、県立医大遺跡（昭和 26 年調査）や附属中学校敷地内遺跡（昭和 38 年調査）の古墳時代の円形住居跡があり、プール上屋取設工事の際（平成元年調査）住居跡の存在が確認され、体育館の増築工事（平成 15 年調査）の際にも古墳時代の方形住居跡 5 軒以上の存在が確認されている。そのため、埋蔵文化財調査室においても、附属中学校付近は古墳時代集落跡のあった地点として注意している。このことから、今回の整備工事に先立ち、埋蔵文化財の試掘調査を行なう必要が生じた。

工事地点において、調査に先立ち、平成 20 年 1 月 14 日に表土層の厚さを確認する試掘調査が行われ、古墳時代包含層の存在が確認された。平成 21 年 5 月 1・2 日で校舎南側と北側にある犬走り・花壇や低木の除去に立ち会い、表採資料として縄文時代前期の曾畑式土器が 1 点得られている。同 5 月 5 日には旧校舎の基礎の除去作業に立ち会ったが、基礎に接して遺物包含層の存在が確認されたため、包含層を調査してから基礎を取り除くこととして、工事業者と調整を行なった。

2 調査体制

所在地	鹿児島市郡元 1-20-15
調査起因	玉利池周辺整備工事
発掘主体者	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治
発掘指導員	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室員 新里貴之
管理技師	国際文化財株式会社 足立 勤
調査員	国際文化財株式会社 安村 健（中村祐一〔途中交代〕）
作業員	石谷美智子・今村ノリ子・鹿倉征治・川口永流・川留辰雄・清川幸一・桐木平 雅代・柴田恵子・下田まき子・末吉サチ子・末吉幸子・末吉サツ子・谷口ノリ・東リヨ子・福満一典・松下郁美・山口雄幸・脇 秋江・脇 春教（五十音順）
発掘期間	平成 21 年 5 月 25 日～平成 21 年 7 月 7 日
調査面積	約 130㎡
遺跡の現状	校舎隣接地帯

3 調査経過

今回の調査は、附属中学校を挟んで、南北に校舎に沿った調査区が設定された。北側を北区（65.4㎡）、南側を南区（68.4㎡）として呼称した。さらに各区は、後世の攪乱によって、遺物包含層が分断されていることを利用し、グリッドの代わりに北区を西側から a～d 地点、南区を a～c 地点とした（Fig. 3）。北区は重機が入らないために、狭い通路を土置場に向かってベルトコンベアを 12 台設置して、人力で表土層からの掘削を行なった。南区は表土層を重機で剥ぎ取ってから人力掘削とした。北区は方形の竪穴住居跡や土坑・ピット群が確認され、南区は土坑・ピット群のみが確認され、明確な竪穴住居跡は確認できなかったが、これは後世の攪乱によって大部分の遺物包含層が削平されたことも関係している。各区・各地点において、遺構ごとに記録・写真撮影を行ないながら掘削し、壁面は北区 c・d 地点の南壁、南区の a 地点のベルトを利用した深掘りトレンチ 3、東壁で壁面を最終確認した。また、北区に 2 箇所、南区に 3 カ所の深掘りトレンチを掘削して土層を確認し、調査を終了した。最終日には、工事業者によって除去された基礎跡下位の

遺構（SD1：後に住居跡と判明した）を調査して、全ての発掘調査を終了した。

4 基本層序

南北区は、校舎建築や配管・マンホールなどの設置など、後世の大規模な攪乱によって表土から包含層にかけての土層が確認できる場所が限定されていた。北区ではc・d地点の南壁，南区はc地点東壁のみが該当地点である。

基本土層として、大別して3枚の層が確認された（PL.1）。1層の攪乱層，2層の古墳時代包含層（住居埋土となっているところが多い），3層の砂層基盤である。3層は基本的に無遺物層であるが，南区のa・b地点では，3層上部に遺物が出土することがある。南北区では，2層の状況がやや異なる。また，南区の東西でも若干の違いがある。ここでは，南区東壁の状況を提示する。

1層：鹿兒島大学時代の造成土層。それ以前と考えられる水田層もブロック状に混じる。

2層：古墳時代の土層。3層に細分される。

a層：黒褐色 10YR2/2 シルト。0.5cm 大のパミス混じり。締まりよい。

b層：黒色 10YR2/1 シルト。0.5cm 大のパミス混じり。締まりよい。

c層：黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。3層土と2層土の混じり土。締まりやや悪い。0.5～3cm 大のパミス混じり（多）。

3層：郡元団地の基盤となっている砂層。人工遺物は含まれない。同地点では7枚に細分した。

a層：褐色 10YR4/4 粗細砂。0.5～3cm 大のパミス混じり（多）。締まり悪い。

b層：にぶい黄褐色 10YR4/3 粗砂。脆い。

c層：黄褐色 10YR5/6 粗砂。0.5～20cm 大のパミス混じり（多）。脆い。

d層：にぶい黄褐色 10YR5/4，褐色 7.5YR4/6，黒色 7.5YR2/1 粗砂・礫の互層。締まり悪い。

e層：黄褐色 10YR5/8 粗砂。締まり悪い。

f層：明褐色 7.5YR5/8 パミス礫。締まり悪い。

g層：にぶい黄橙色 10YR6/4 粗砂。締まり悪い。

5 各トレンチと遺構（Fig. 3・4，PL.2～7）

北区は，竪穴住居跡・溝・土坑・ピットなどが確認されている。しかし，ほとんどが大規模な攪乱を受け，全形が窺えず，ピットなども配列を掴むことができない状況であった。a地点では溝SD1の残りが基礎下位の北東隅に若干残っていた。b地点には断面でしか存在の分からない住居跡SK7の下位に，他の住居とは埋土の状況の異なる掘り込みが見られ，これを溝SD1としていたが（Fig.4，PL.2・3），調査最終日の基礎除去後の発掘で，a・b地点の基礎下位において，同遺構の平面形が方形を呈していることが判明し，住居跡であることが分かった（SK16と呼び変える：遺物整理の際注意）。貼り床上で2基のピットが検出されたが，これは確実に住居に伴うものと考えられる（PL.3）。c地点は北区で最も包含層残存状況の良いところであるが，切り合い関係の明らかなものとして住居跡3軒（SK8・9）と，その合間と下位のレベルにあると考えられる住居跡3軒（SK12～13），帰属不明のピット群がある。興味深い例として，住居跡SK3埋没後に小規模な河川跡SD4が住居跡を破壊していることで，あり，その後はまた古墳時代の土層が覆っている（図5f～h）。住居跡（SK9）→河川跡（SD4）→古墳時代覆土（2a層）の遺物は，いずれも成川式に相当するものと考えられ，比較的短期間のサイクルで河川と覆土が形成されていると考えられる。c地点は，溝跡SD2・3のほかは性格不明の遺構（SK10・11）がある。その他無数のピット群が検出されている。比較的しっかりしたものにp31があり，p59では柱痕がみられる。また，p33・35・36は配列があるように見えたが，確言できない。

南区では，性格不明の土坑とピット群が検出されている。a地点では，性格不明の土坑（SK1～4・15）がある。p1・74はしっかりとしたピットである。b地点ではピット群が検出されたが，中央部の配置が並んでいるように見え，建直しを数度行なった掘立柱建物跡の可能性もあるが（Fig.4，PL.6），全形が不明であるので

II 発掘調査の概要

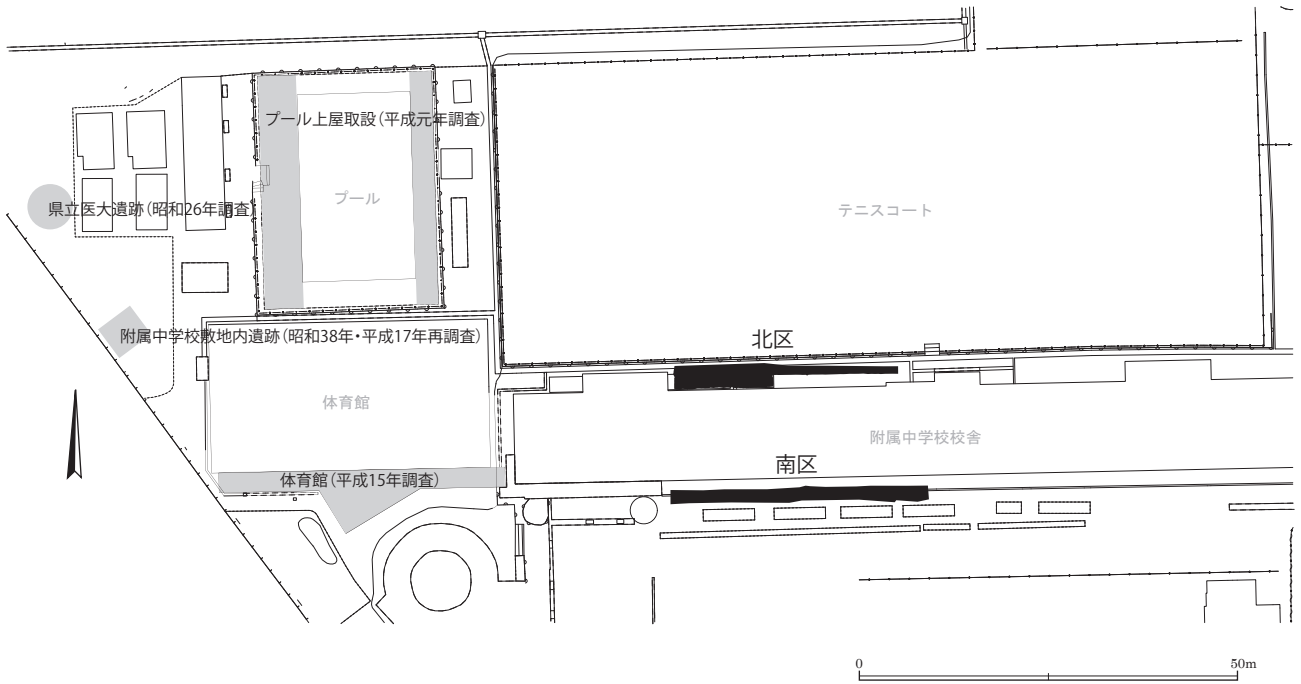


Fig.3 調査区の位置と周辺の調査地点 (S=1/1000)

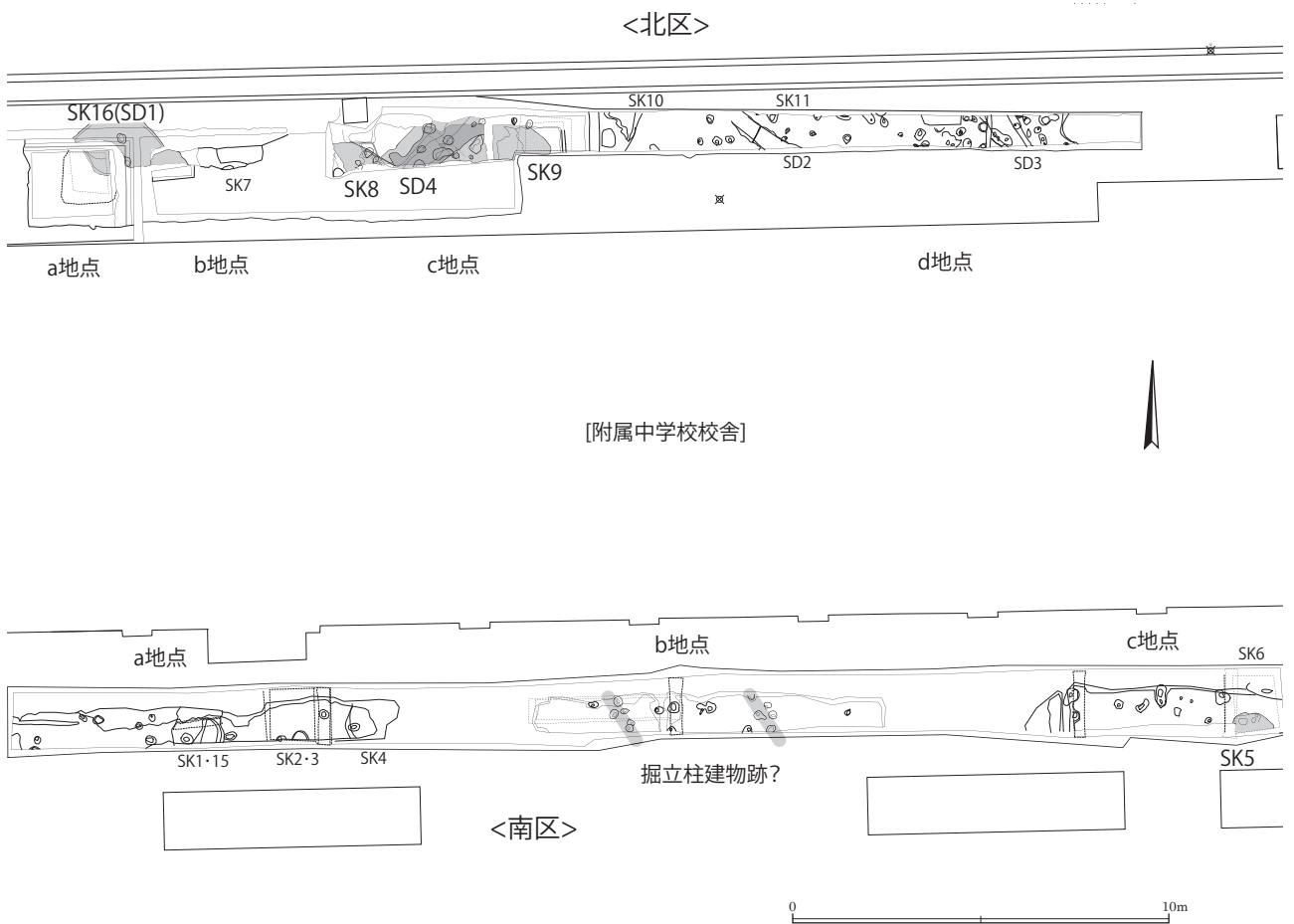


Fig.4 遺構配置 (S=1/200)

II 発掘調査の概要



PL.1 基本土層 (南区東壁)



PL.2 北区 b 地点 SK16(SD1) と SK7



PL.3 北区 a・b 地点 SK16(SD1) 貼床とピット



PL.4 北区 c 地点 SK9 と SD4



PL.5 北区 c 地点 SD4 掘り下げ



PL.6 南区 b 地点掘立柱建物跡? 配置



PL.7 南区 c 地点 SK5 上面遺物

確言できない。c地点においても土坑2基（SK5・6）とピット群が検出されている。SK5は上部に東原式の高坏が出土している（Fig.4, PL.7）。成川式でも古い段階であるため、この時期の包含層が存在するのかが注意が必要であろう。

6 遺物

遺物は小破片がほとんどであり、石器類も少なかった。唯一全形の窺えるのは、東原式の高坏で、脚部にスカシがある（PL.7）。

7 まとめ

本調査地点は、包含層の残存度は悪かったものの、住居跡が数軒、切り合う様子があり、集落跡の一部を構成している地点であることが判明した。附属中学校敷地内において、今後も工事に際しては、慎重な対応が必要であろう。

2009-2 郡元団地 J-5 区（共通教育棟樹木移植工事）発掘調査

1 調査にいたる経過

鹿児島大学では平成20年～21年度にかけて、郡元キャンパス稲盛通り道路改修その他工事が計画され、共通教育棟2号館中庭に樹木を移植することになった。工事地点は、共通教育棟2号館改修工事に伴って実施した平成19年度の発掘調査地点（2007-2）に隣接する（Fig.5）。2007-2では、縄文時代中期～近代の遺構や遺物包含層が複数層確認されたが、特に、古墳時代の竪穴住居跡が密集して検出され、多量の遺物も出土した。これらの結果から、本地点でも埋蔵文化財が濃密に埋蔵されていると予想され、本調査を実施することとなった。

2 調査体制

所在地	鹿児島市郡元 1-21-24
調査起因	樹木移植工事
発掘主体者	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室長 新田栄治
発掘指導員	鹿児島大学埋蔵文化財調査室 室員 中村直子
管理技師	国際文化財株式会社 足立 勤
調査員	国際文化財株式会社 東園千輝男
作業員	石川裕也・上拾石キヨ子・川越まゆみ・北村浩士・寒川朋枝・園山トミエ・粒崎幸蔵・長野陽介・矢住純子・吉永幸子（五十音順）
調査期間	平成21年5月25日～7月13日
調査面積	13㎡
遺跡の現状	校舎隣接地帯

3 調査経過

調査は、表面のインターロッキングを除去したのち、重機で表土を掘削した。地表下30cmで一部にプライマリーな層が検出されたため、それ以下は人力による掘削を行った。地表下15cmから調査区西側にコンクリートブロックの柵が検出された。このコンクリート柵は地表下2m以上の深さまで埋まっており、無遺物層となる基盤の砂層を掘りぬいていると予想されたため、コンクリート柵より東側を調査することにした。

調査は、新しい層の上面で遺構を確認しながら層ごとに掘削を行った。3層上面では畑の畝間溝が、4層

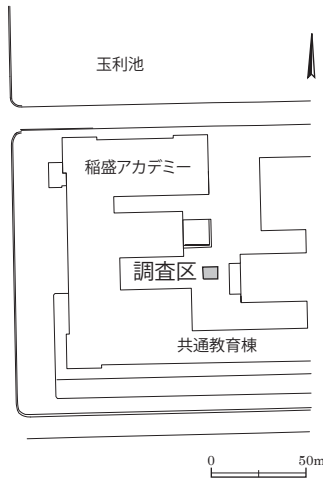


Fig.5 調査区の位置 (S=1/2000)

上面では土器集積遺構が、4層中では住居跡が3基確認できた。遺構は検出写真・埋土断面写真と測量、完掘写真と測量を実施した。出土遺物は器種や部位が判別できるものについて、ポイント測量を行いながら取り上げた。遺構に関係し、かつ原位置をとどめていると考えられるものは、出土状況の測量を実施した。

5層上面からは埋蔵文化財の有無を確認するため、さらに2mの深さまで荒い掘削を行った。遺物は出土しなかったが、底面付近で貝殻が2点出土した。本学法文学部の森脇広教授の指導をお願いしたところ、貝殻は自然堆積による海浜堆積物であることが判明した。

完掘状況の写真撮影を行い、トレンチの北壁・東壁・南壁の層位断面図を作成し、土層観察を行い、土層のサンプリングを行った後、調査を終了した。

4 基本層序 (Fig.6)

- 1層 インターロッキングと表土。
- 2a層 黄灰色 2.5Y6/1 砂質シルト。0.5～1cm大のパミス含む。硬くしまっている。水田層か。
- 2b層 灰黄褐色 10YR4/2 砂質シルト。0.5～1cm大のパミス含む。硬くしまっている。水田層か。
- 3a層 灰黄褐色 10YR5/2 シルト質砂。
- 3b層 灰黄褐色 10YR6/2 シルト質砂。黄色・白色のパミス含む。
- 4a層 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂。砂質シルト，鉄分多く，硬い。
- 4b層 黒褐色 10YR3/2 シルト質砂。砂質シルト。
- 5層 砂層。一部軽石礫を含む。

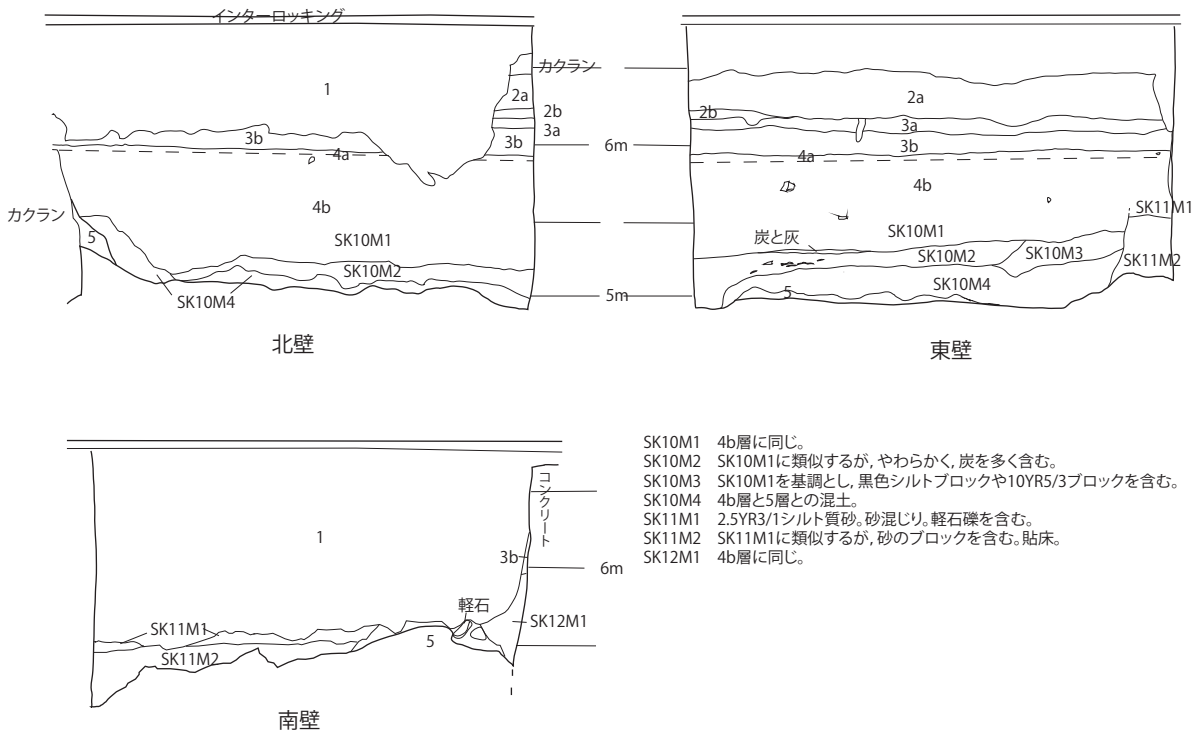


Fig.6 層位断面図 (S=1/50)

5 遺構

遺構は、3層上面・4層上面・5層上面より検出された。

1) 3層上面遺構 (PL.8)

溝状遺構が8条検出された。いずれも幅30cm、深さ2～3cmほどで、埋土は上層の2層土に類似する。並行に位置することから、畑の畝間溝であると推定できる。畑は2層に伴うものであり、近世のものと推定できる。

2) 4層上面遺構 (PL.9)

3層と4層の境界に遺物集積遺構が確認できた。土器や須恵器、石器や自然石、軽石などが4層中にめり込みながらも、4層上面に張り付くように検出された。周辺の過去の調査でも同様な遺物集積遺構は確認されている。本調査区で確認されたものは、過去の事例よりは土器片が小さく薄く堆積しているため、遺物集積遺構の周縁部であるとも考えられる。出土遺物のほとんどは土器で、笹貫式であると思われるが、須恵器の中には8世紀代のものも含まれており、5層上面で検出された住居跡に伴う笹貫式土器より新しい時期のものであると考えられる。

3) 5層上面検出遺構 (Fig.7・PL.10・11)

古墳時代の竪穴住居跡が3基確認されている (SK10～12)。いずれも切りあって調査区外に広がっていることから、全形を確認できるものはないが、平面プランが方形の竪穴住居であると推定できる。SK12は壁面立ち上がり部しか検出できず、床面等は確認できなかったが、SK10・11については、床面や掘り面が確認でき、どちらも貼床を持つタイプであることがわかった。

さらに、SK10は床面が2面確認できた。上層の床面からは、ほぼ完全な2個の土器が出土し、笹貫式土器の時期であることが判明した。また、炉跡の一部であると考えられる炭層もそれぞれの床面で検出できた。なお、ふたつの床面の間層内には、炭化材が含まれていた。

6 遺物

遺物は、陶磁器・須恵器・成川式土器 (笹貫式が多い)・弥生土器・石器・黒曜石片などが出土している。コンテナ (60×40×15cm) 数に換算すると約20箱出土している。また、自然遺物ではあるが、深堀トレンチの底面付近より貝殻が2点出土した。

7 まとめ

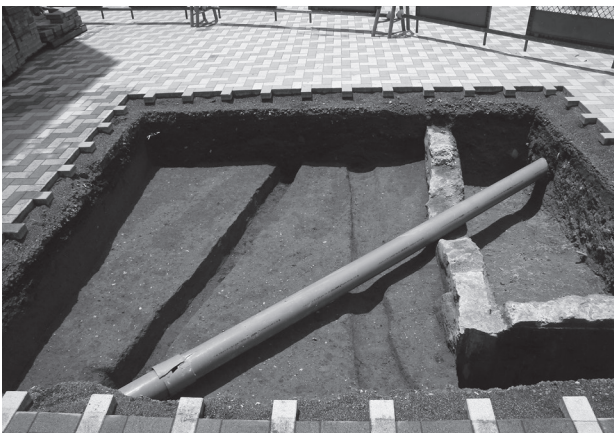
本調査区では、13㎡という狭い調査区ながら、近世～弥生時代の遺物が多量に出土した。遺物包含層としては、近世・中世・古代初頭・古墳時代～弥生時代が確認できました。遺構も近世・古代初頭・古墳時代のものを検出した。特に、古墳時代後半期の竪穴住居跡を3基検出し、調査区外にも同様な遺構が濃密に埋蔵されていることを示唆している。

周辺の過去の調査では、古墳時代中期～後期の住居跡が密集して検出されており、2007-2では垂直方向に4基重なり合っている遺構も検出されている。何度も同じ場所に住居を建て直した結果であるとともに、金銅製品などの希少品も出土しており、この時期の拠点集落の中心部にあたると考えられる。周辺の工事の際には慎重な対応が必要である。

II 発掘調査の概要



Fig.7 SK10・11 平面図 (S=1/40)



PL.8 3層上面溝状遺構検出状況



PL.9 4層上面遺物集積遺構検出状況



PL.10 SK10 床面1 検出状況



PL.11 SK10 床面1 出土状況

Ⅲ 試掘調査

2009-3 郡元団地 H・I-5・6 区（玉利池周辺整備工事）試掘調査

1 調査にいたる経過

鹿児島大学では、郡元団地内において農学部開学 100 周年記念事業に伴い、玉利池周辺整備工事が予定された。工事の掘削深度は 15cm 程度で、最大 60cm であるとされている。同地区では、学生などの憩いの場所となっており、これまで大規模な工事とはほとんど無縁の場所であったため、土層データが把握されていなかった。しかし、南接した共通教育棟・稲盛アカデミー地点では、地表下 15cm で遺物包含層が検出され、古墳時代住居跡が 100 軒以上検出されている（平成 19 年度調査：2007-2）。このことから、今回の整備工事に先立ち、埋蔵文化財の試掘調査を行なう必要が生じた。

そこで、教育学部附属中学校発掘調査（2009-1）の最終段階に、国際文化財株式会社のご好意によって、調査員と作業員を借り受けることができ、両地点の調査を並行させながら、調査を行なうこととなった。

2 調査体制

所在地	鹿児島市郡元 1-21-24		
調査起因	玉利池周辺整備工事		
発掘主体者	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	室長	新田栄治
発掘指導員	鹿児島大学埋蔵文化財調査室	室員	新里貴之
管理技師	国際文化財株式会社 足立 勤		
調査員	国際文化財株式会社 安村 健		
作業員	石谷美智子・桐木平 雅代・柴田恵子・末吉サチ子・末吉幸子・末吉サツ子（五十音順）		
発掘期間	平成 21 年 7 月 6 日～平成 21 年 7 月 7 日		
調査面積	約 4㎡		
遺跡の現状	緑地帯		

3 調査経過

今回の調査は、舗装されていない場所をできるだけ広い範囲の様相が分かるように、1 × 1㎡の範囲、深さ 60cm とし（工事掘削最大深度 60cm のため）、トレンチを 4 か所に設定した。これらを掘削した順序に 1～4TR とした（Fig.8）。各トレンチともに写真撮影と地形測量を並行させながら、記録していった。

結果、2TR 以外はすべて攪乱されており、僅かに北壁のみ残った 2TR もほとんどが攪乱されていることが分かった。土層データを記録し、埋め戻して原状に復した。

4 層序と各トレンチの状況

土層の判明したのは、2TR のみであることから、同トレンチを記載する。基本土層として、大別して 5 枚の層が確認された（Fig.9, PL.12・13）。1m の深度まで掘削している。1 層の攪乱層のほかは、河川堆積層であると考えられた。

1 層：旧・高等農林学校や現・鹿児島大学時代の造成土層。約 50cm の厚さ。

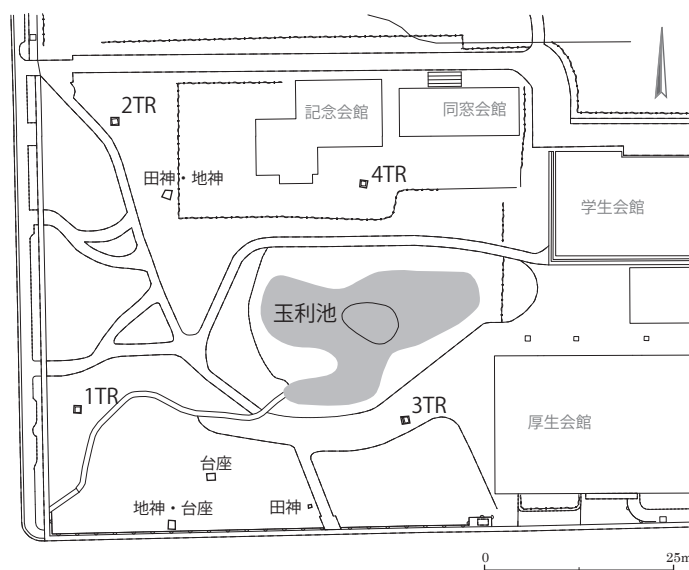


Fig.8 試掘トレンチ配置 (S=1/1000)

- 2層：黄褐色 10YR5/6 細砂。締まりよい。
- 3層：暗褐色 10YR3/3 細砂。締まりよい。マンガンの浸透あり。
- 4層：灰黄褐色 10YR4/2 細砂。締まりよい。
- 5層：灰黄褐色 10YR5/2 細砂。締まりよい。

おそらく、2～5層は弥生時代～古墳時代において郡元団地を東西に横断する大規模な河川跡の一部であると考えられる。1層で赤色顔料を塗布した土器片1点、5層より突帯部などを含む土器小片8点が出土している。その特徴からみて成川式土器であろう。

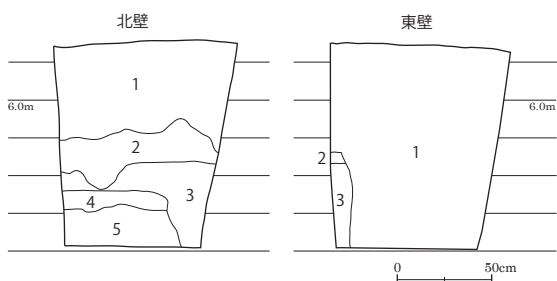


Fig.9 2TR断面 (S=1/40)

1TRは50cm深度で加工した石材の廃棄が見られ、これ以下の深度は確認していない。高等農林学校時代の道路の材の一部であると考えられる (PL.14)。

3TRは西壁側にゴミ穴が確認され、ビン類が出土した。鹿児島大学時代のものであろう。深さ85cmまで攪乱であった (PL.15)。4TRは深さ65cmまで攪乱であった。



PL.12 2TR北壁



PL.13 2TR東壁



PL.14 1TR(西より)



PL.15 3TR(北より)

5 まとめ

本試掘調査では、工事の掘削深度まではほとんどが攪乱の範囲であった。最も残りの良い2TRでも50cmまで攪乱されている。また、高等農林学校時代の構内図をみる限り、玉利池の規模はかなりの大きさを持っていたようである。そのため、池の縮小に伴う造成によって埋められた場所が多いと考えられる。

本調査箇所以南に接する、古墳時代集落跡の包含層範囲はいまだ確定しておらず、玉利池敷地南側では工事の際、慎重な対応をとらねばならないと思われる。

IV 立会調査

平成 21 (2009) 年度は、郡元団地内で 14 件、桜ヶ丘団地内で 2 件、計 16 件の立会調査を実施した。国立大学法人化以後、調査は鹿児島市教育委員会が担当することになっているが、ガス漏れや漏水などの緊急時や、双方の日程の都合のつかない場合は、埋蔵文化財調査室単独で調査を行なっている。以下にその概要を記す。なお、遺物の詳細に関しては、Tab.3 (27 頁) の観察表を参照いただきたい。

2009-A 稲盛通り道路改修その他工事 (Fig.1・10・11)

調査地点 郡元団地 H～L-7～13 区

調査期間 2009 年 6 月 1・2 日

調査担当 鹿児島市教育委員会 永野達郎

埋蔵文化財調査室 中村直子・新里貴之

理・工学部において道路改修工事のため、9 か所の調査を行なった。①地点は掘削深度 125cm であり、7 枚の層が確認された。2 層以下は水田層であると考えられた。3b 層と 4a 層の境界で土器が集中して出土し、成川式甕の突帯部と思われる小破片 1 点、無文胴部 6 点が得られている。②地点は 120cm の掘削深度で、5 枚の層が確認された。3・4 層は河川堆積層と思われた。遺物は得られていない。③地点は 90～110cm の掘削深度で攪乱されていた。④地点では、掘削深度 108cm で 4 枚の層が確認された。2 層では成川式突帯部片 1 点ならびに無文胴部片 2 点が出土し、3 層では弥生土器と思われる平底 1 点が出土している (Fig.11-1)。⑤地点では 122cm 掘削し、8 枚の層を確認している。5 層で無文土器片 1 点が出土している。⑥地点も同様に 122cm 掘削し、⑤地点に類似した 5 枚の土層を確認した。遺物は得られていない。⑦地点は 124cm 掘削し、6 枚の層を確認した。2～3 層は水田層、4 層が弥生～古墳時代の遺物包含層と考えられ、赤色顔料を塗布した土器片が 1 点出土している。⑧地点は 130cm の深度で 7 枚の層を確認し

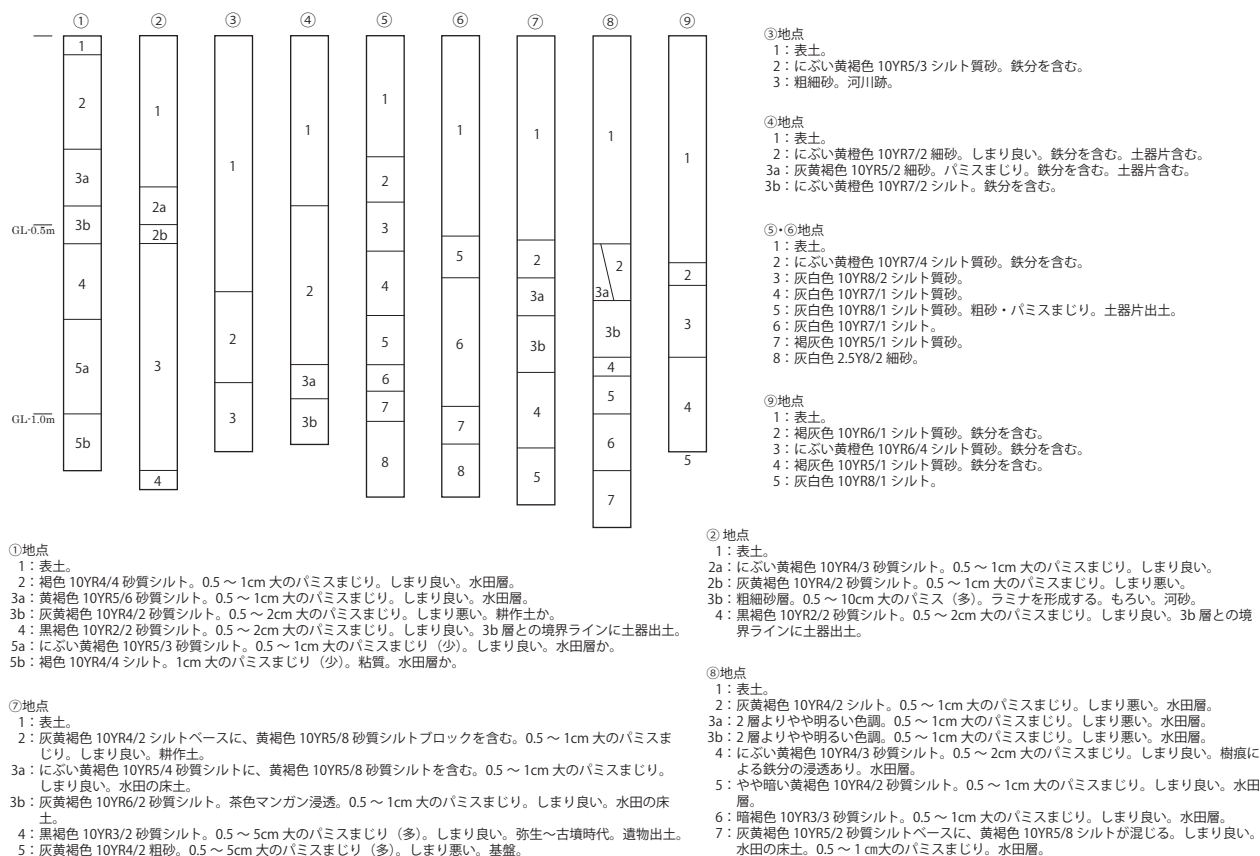


Fig.10 2009-A 柱状図

ているが、2層以下は水田層のようである。1（攪乱）層で弥生時代中期後半の山ノ口式土器の小型甕口縁部片1点が出土している（Fig.11-2）。⑨地点では110cm掘り下げ、5枚の層を確認している。遺物は確認されていない。

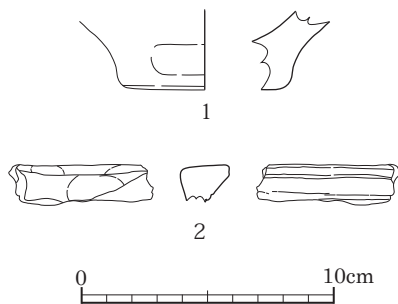
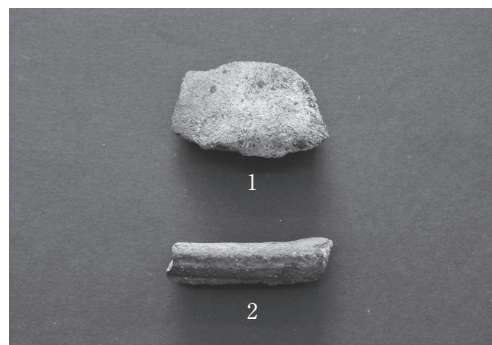


Fig.11 2009-A 出土遺物 (S=1/3)



PL.17 2009-A 出土遺物

2009-B キャンパス情報ネットワーク設備 (Fig.1・12)

調査地点 郡元団地 H-9, J-8, O-5 区

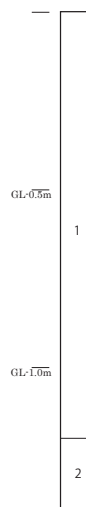
調査期間 2009年5月7日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行

埋蔵文化財調査室 中村直子

工学部・教育学部のネットワーク配線工事のため、飛び地的に調査が行なわれた。

①地点は120～140cm掘り下げ、地表下110～120cmでプライマリーな包含層が検出されている。遺物は得られていない。②地点は70cmの掘削深度で攪乱されていた。



1: 表土。
2: 黄白色シルト質砂。粗砂・軽石を含む。

Fig.12 2009-B ①柱状図

2009-C 陸上競技場改修工事 (Fig.13～16, Tab.2, PL.34～37)

調査地点 郡元団地 M～O-8～11区

調査期間 2009年4月15・20～22日

調査担当 鹿児島市教育委員会 有川孝行

埋蔵文化財調査室 中村直子・寒川朋枝・新里貴之

陸上競技場の排水改善のための、側溝の再設置工事に伴う立会調査を行なった。広範囲となるため、4月15日にA～Gの7カ所で試掘し、弥生～古墳時代の包含層分布の確認を行なった。その結果、弥生～古墳時代の包含層の分布は、陸上競技場西側隅の北西～南東方向へと認識し、外側と内側側溝ライン、そして搬入口を基点に、西と南に分けて調査を行なった。これより東側は河川跡あるいは近世以降の水田層（2

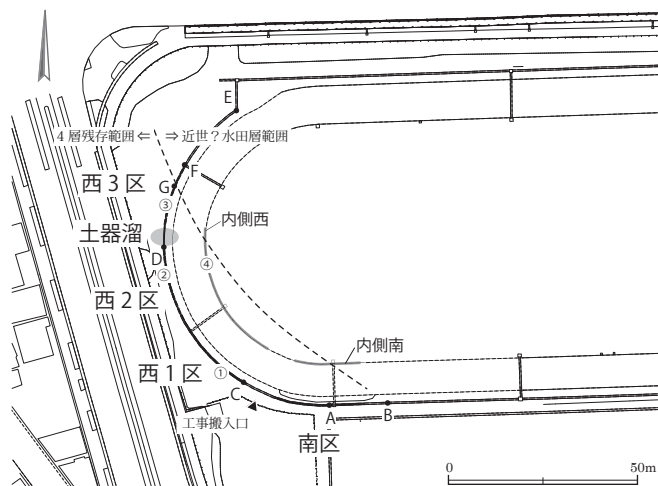
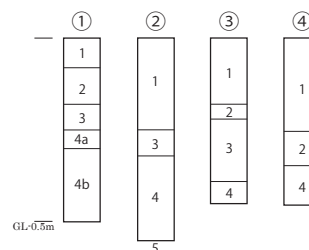


Fig.13 2009-C 陸上競技場調査地点



①～④地点
1: 表土。
2: 灰色砂質シルト。水田層。近世か。
3: 黄褐色シルト質砂。
4a: 黒色シルト。鉄分浸透。
4b: 黒色シルト。
5: 黒色シルト質砂。

Fig.14 2009-C 柱状図

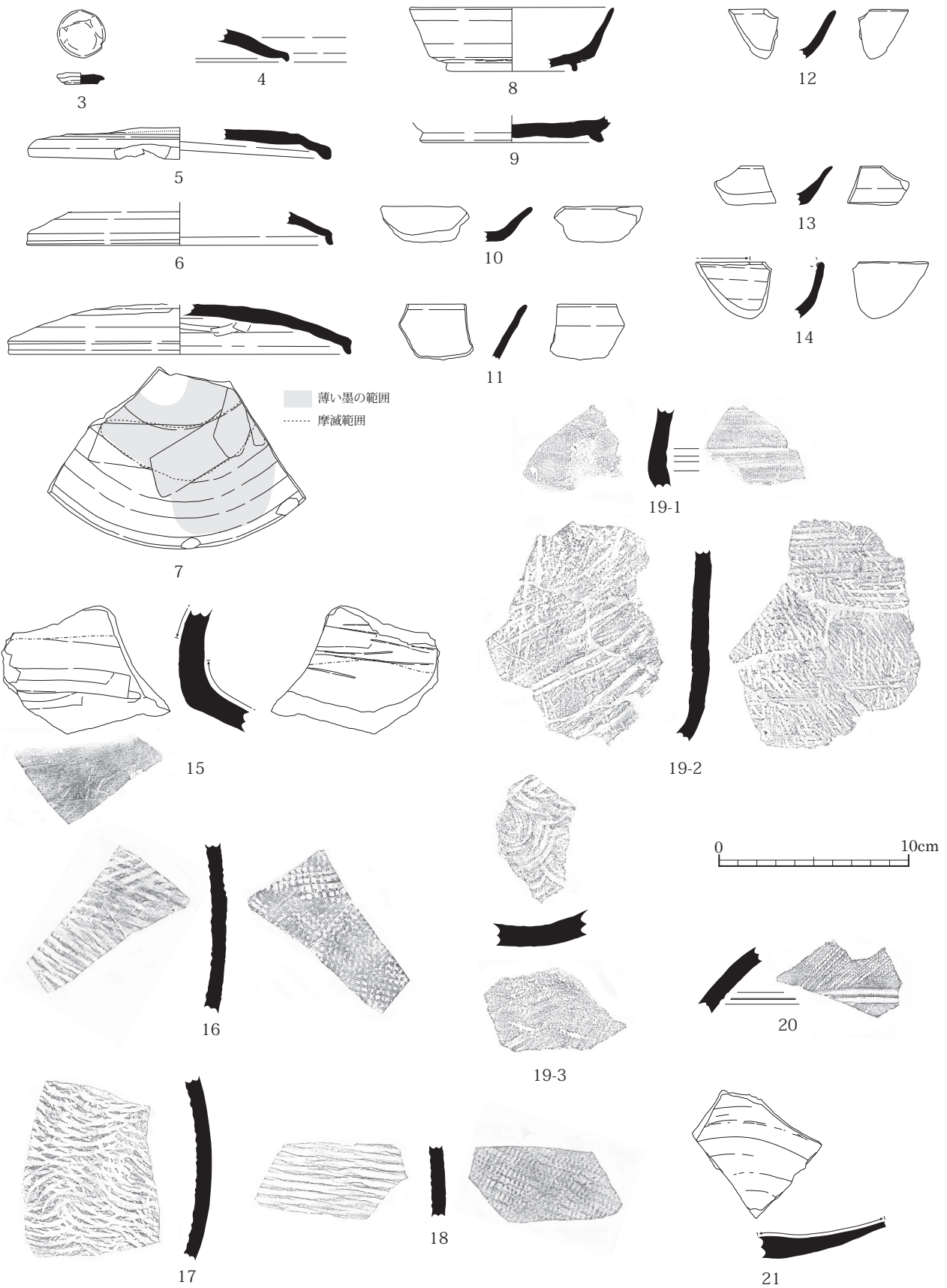


Fig.15 2009-C 出土遺物 (須恵器) S=1/3

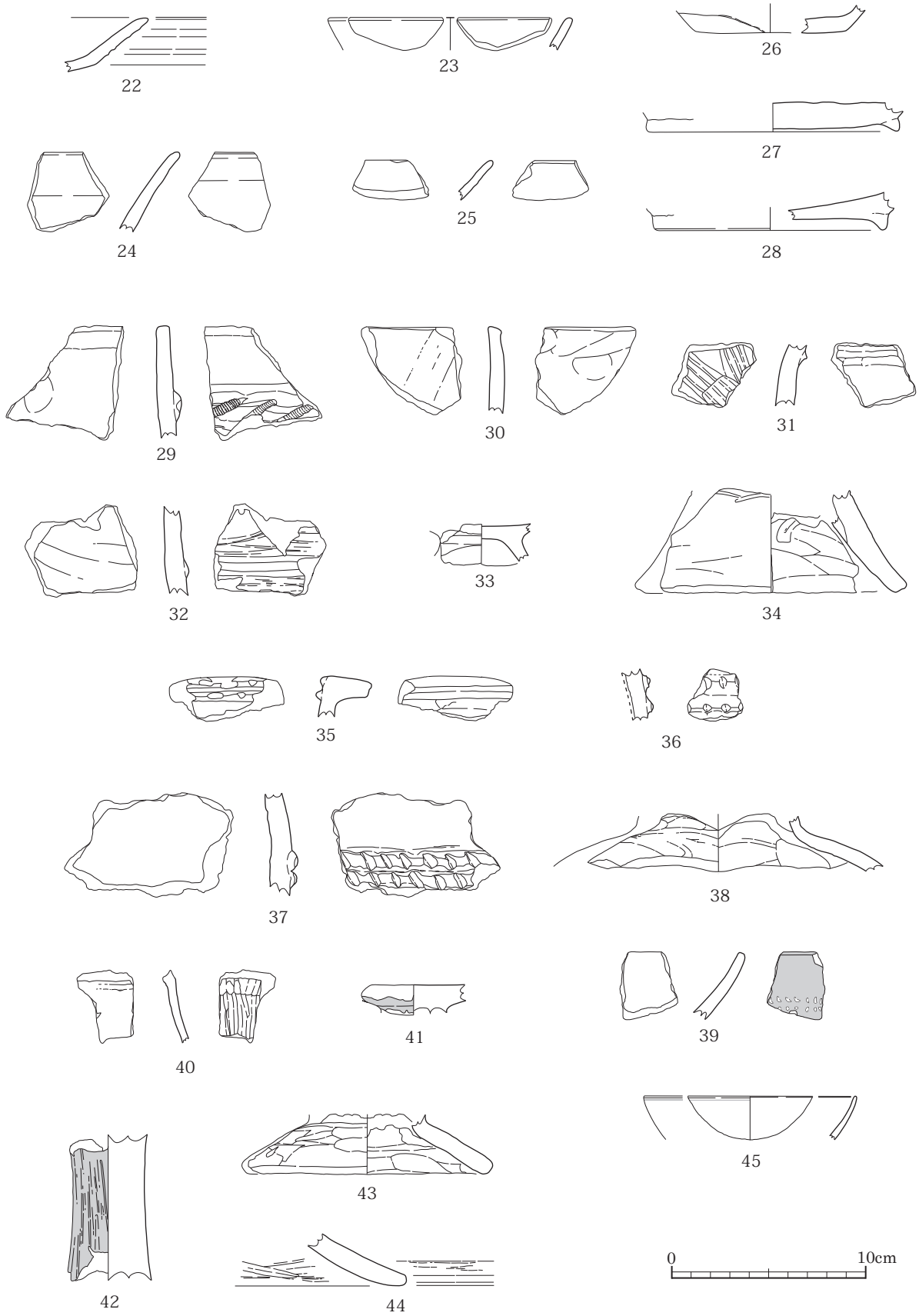


Fig.16 2009-C 出土遺物 (土師器・土器・磁器) S=1/3

層)によって削平されている。外側側溝の西には、4層上面に遺物がびっしりと貼りついたような、いわゆる土器溜りが検出された。その他の遺構は確認されていない。4層が弥生時代～古墳時代の遺物包含層となる (Fig.13・14)。

遺物の内訳は、弥生土器3点、成川式土器(弥生土器や小片の土師器も含まれている可能性もある)1434点、古墳時代の須恵器3点、古代の須恵器86点、土師器34点、近現代の陶磁器5点、石11点の総計1576点である (Tab.2)。ほとんどが1～5cm程度の破碎した成川式土器であるが、古代の須恵器や土師器も一定量出土した。層的に最も出土量の多いのは4層上面であり、土器溜りに由来する。続いて4層となる。古代の遺物は4層上面に多いものの、4層にも一定量含まれる。また、陶磁器やレンガなどの近現代遺物も4層上面や4層で採集されているが、これらは掘削時の壁面からの落ち込みと考えておきたい。

器種の確認できる資料として、古代の須恵器は甕壺類が50点で最も多く (Fig.15-15～19)、次いで蓋24点 (Fig.15-3～7)である。転用硯もあり、内面に摩滅と墨の付着がわずかに確認される (Fig.15-7)。続いて坏6点 (Fig.15-8～11)、皿4点 (Fig.15-13・14)の順になる。また、この古代の須恵器のなかには酸化焰焼成した赤焼須恵器の甕壺類 (22点: Fig.15-19) や蓋 (2点: Fig.15-4)、皿 (1点) が含まれる。古墳時代の須恵器は甕1点と坏1点が得られている (Fig.15-12・20)。土師器は坏 (16点) が最も多く (Fig.16-22～26)、高台のつく椀 (4点: Fig.16-28)・鉢 (2点: Fig.16-27・28) もわずかに認められる。弥生土器は壺が3点得られている (Fig.16-35・36)。成川式土器は、甕 (97点: Fig.16-29～34)、壺 (29点: Fig.16-37・38)、高坏 (15点: Fig.16-40～44)、埴 (4点: Fig.16-39) が認められ、甕が最も多い。その特徴からみて、最終段階の篋貫式土器と考えられる。成川式土器には伝統的な煮沸具、貯蔵具、供膳具が認められるが、古代須恵器・土師器のセットには、土師甕という煮沸具が欠落している点、そして、これらがほぼ同レベルの土器溜りで出土している点が注意される。しかし一方で、成川式土器にはほとんど復元できない少破片が多いことも特徴となっている。

古代の須恵器の蓋や坏からすると、8世紀後半頃の遺物が主体であり、土師器もほぼ同時期のものと考えられる。1点のみ8世紀末～9世紀前半の須恵器坏も認められる (Fig.15-9)。

2009-D 共通教育棟3号館改修その他工事 (Fig.1・17)

調査地点 郡元団地 K・L-7・8区

調査期間 2009年11月19日、2010年2月12・17日

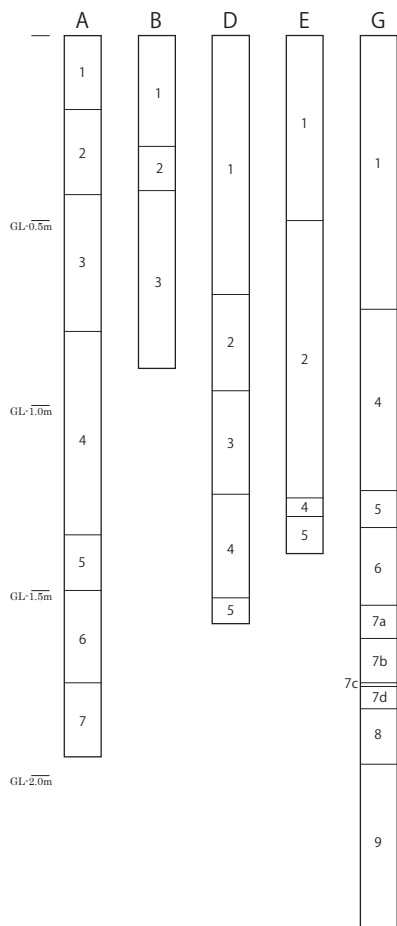
調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 中村直子・新里貴之

共通棟3号館改修工事に伴い、周辺の整備工事が行われた。共同溝へ配管するA地点は195cm掘削し、7枚の層を確認し、2～4・6層は水田層と考えられた。遺物は得られていない。樹木移植先であるB地点では90cm掘削し3枚の層が確認され、2・3層が水田層と考えられた。C地点は移植元であるが、掘削深度100cmまで攪乱であった。どちらも遺物は得られていない。外灯設置地点であるD～G地点は140cm掘削した。E・G地点は攪乱され、A地点では5枚、B地点では4枚の層が確認された。5層が弥生～古墳時代の包含層であると考えられる。遺物は出土していない。モニター槽設置箇所であるH地点では280cmの深度まで掘削し、10枚の層を確認した。7a層が弥生時代の水田層と考えられた。遺物は得られていない。

Tab.2 2009-C 遺物集計

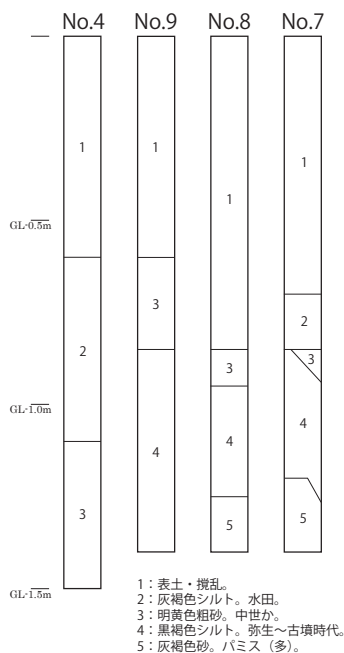
地区	層	弥生	成川	古墳須恵器	古代須恵器	土師器	近現代	石	計
西・西1 ～3・土器 溜・C・D・ F・G	1		3		1			1	5
	3		2			1			3
	4上		389	2	56	17	2	1	467
	4	2	936		26	14	1	9	988
南	3		3						3
	4上	1	24	1					26
	4		25						25
内側	1					2		2	
内側西	4		2					2	
内側南	2		1						1
	4		22						22
地区不明	4上		26		3	2			31
地区層位不明			1						1
計		3	1434	3	86	34	5	11	1576



- A地点
 1: 表土。
 2: 暗褐色 10YR3/3 砂質シルト。0.1～0.5cm 代のパミスまじり。しまり良い。水田層。
 3: 黒褐色 10YR3/2 砂質シルト。0.5～2cm 大のパミスまじり。しまり良い。水田層。
 4: 灰黄褐色 10YR5/2 シルト。0.5～1cm 大のパミスまじり。粘質。水田層。
 5: 黒褐色 10YR3/2 シルト。粘質。弥生～古墳時代か。
 6: 灰黄褐色 10YR5/2 シルト。粘質。7層土がブロック状にまじる。水田層か。
 7: 黒色 10YR1.7/1 シルト。かなり粘質。
- B地点
 1: 表土。
 2: 灰黄色 2.5Y6/2 シルト。水田層。
 3: 褐灰色 10YR6/1 シルト。水田層。
- D～G地点
 1: 表土。
 2: にぶい黄褐色 10YR7/2 シルト質砂。3cm 大以下のパミスまじり。近世以降か。
 3: 黄灰色 2.5Y5/1 シルト質砂。パミスをわずかに含む。近世以降か。
 4: 灰白色 10YR8/1 砂質シルト。パミスをわずかに含む。
 5: 褐灰色 5YR5/1 シルト。均質。古墳時代か。
 6: 灰白色 10YR8/1 シルト。パミスをわずかに含む。
 7a: 6層と7b層のまじり土。弥生時代の水田層か。
 7b: 灰色 5Y4/1 シルト。
 7c: 灰白色 2.5Y8/2 シルト。
 7d: 灰色 5Y4/1 シルト。
 8: 黒色シルトと砂礫のまじり土。
 9: 砂礫。

Fig.17 2009-D 柱状図

外灯の取り替え、新設工事に伴い計8か所の立会調査を行なった。No.1～3・9は既設外灯の周辺既掘部を掘るのみで攪乱層であった。No.7・8が新規に掘削した部分である。No.1が140cm, No.2が160cm, No.3が140cm深度まで掘り下げた。No.4は150cm掘り下げ、3枚の層が確認された。No.8は、140cm深度まで掘り下げ、5枚の層が確認された。No.9は140cm深度で既掘部の掘削であったが、攪乱層より成川式壺の底部付近の資料1点と無文胴部1点が得られてい



- 1: 表土・攪乱。
 2: 灰褐色シルト。水田。
 3: 明黄色粗砂。中世か。
 4: 黒褐色シルト。弥生～古墳時代。
 5: 灰褐色砂。パミス(多)。

Fig.18 2009-F 柱状図

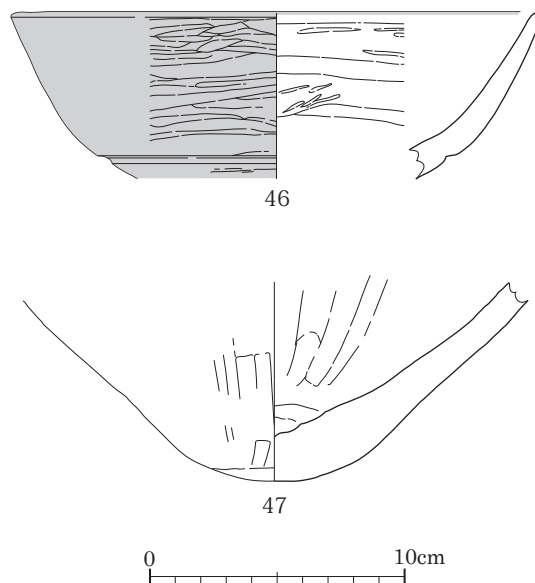


Fig.19 2009-F 出土遺物 (S=1/3)

2009-E 教育研究棟新営工事 (Fig.2)

調査地点 桜ヶ丘団地 H・8・9区
 調査期間 2009年12月22日,
 2010年3月8日
 調査担当

鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
 埋蔵文化財調査室 寒川朋枝
 桜ヶ丘団地において、共通教育棟建設地の一部で立会調査を行なった。A・B両地点ともに最大掘削深度である70～80cmを掘削したが、攪乱されていた。A地点では攪乱層より縄文時代晩期末～弥生時代前期頃の深鉢形土器口縁部小片を得ることができた。

2009-F 法文学部1号館改修(II期) その他工事 (Fig.1・18・19)

調査地点 郡元団地 K・L-3～5区
 調査期間 2009年9月1・8日
 調査担当

鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
 埋蔵文化財調査室 中村直子

る。No.7は140cm深度で掘り下げ、掘削地点の南西隅に北西—南東方向の落ち込みが確認された。5枚の層が確認され、2層が近世以降の水田跡、3層が中世の溝、4層が弥生～古墳時代の包含層、5層が基盤砂層と考えられる。この5層へ掘りこんだ4層土の落ち込みより、比較的残りの良い高坏の坏部1点 (Fig.19-46, PL.38)、壺底部1点 (Fig.19-47, PL.38)、無文胴部2片が得られている。この落ち込みが位置的に中央図書館増築地D地点の大溝SD4¹⁾の延長上に認められる点や、遺物の残りが比較的よいことから考えて、同一溝である可能性も考えられる。

2009-G 工学部管理棟改修工事 (Fig.1・20)

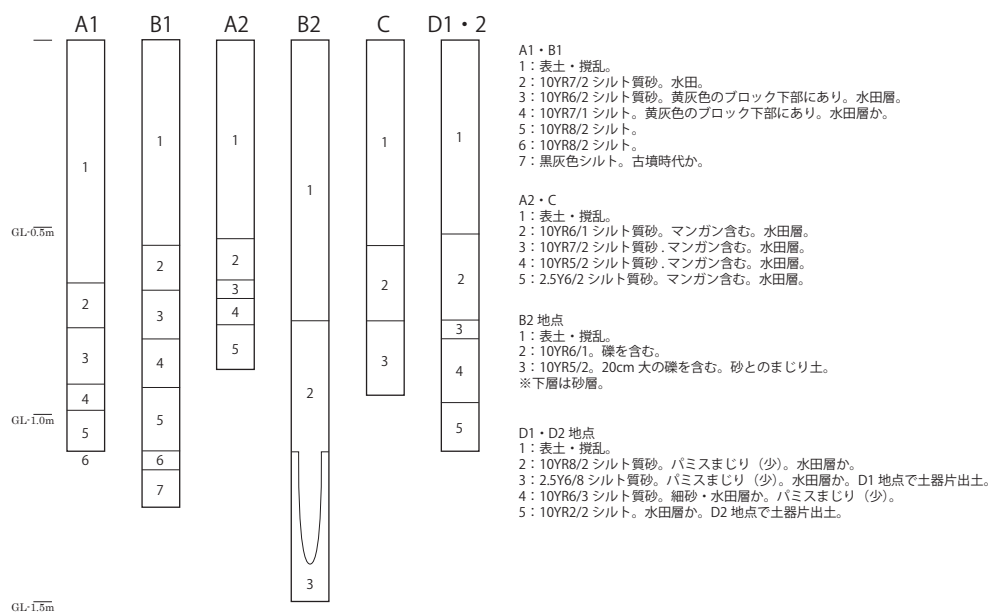
調査地点 郡元団地 L-10・11 区

調査期間 2009年12月24日, 2010年3月1・2日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 中村直子

工学部事務棟の東側階段取り付け部の工事では、2か所を調査した。B1地点では125cmを掘削し、7枚の層が確認された。2～6層まで水田層と考えられた。7層は弥生～古墳時代の包含層と考えられた。遺物は得られていない。A1地点では110cmを掘削し、6枚の層が確認されたが、土層はB1地点と同じである。



配管工事では4か所を調査したが、A2地点は88cmのまで既掘部であり攪乱層であったが、壁面で5枚の層が確認された。2～5層まで水田層と考えられた。B2地点は150cmの深度で掘削し、3枚の包含層を確認したが、土層の様子はA2地点と同様である。D地点は120cm掘削し、5枚の層が確認された。2～4層まで水田層と考えられた。3・5層より無文土器胴部片各1点が得られている。

2009-I 附属中学校 (II期) その他電気設備工事 (Fig.1・21)

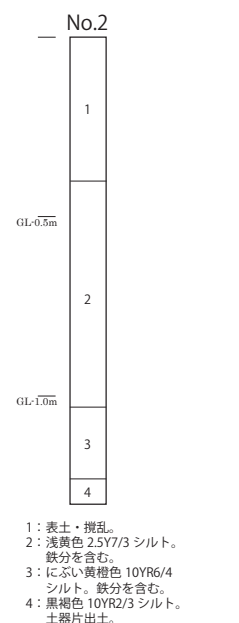
調査地点 郡元団地 Q・R-9 区

調査期間 2009年11月25日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫

埋蔵文化財調査室 寒川朋枝

正門の街路灯設置工事で、既設灯除去後、深度130cmまで掘削し、4枚の層を確認した。2層が水田層と考えられた。4層は弥生～古墳時代の包含層と考えられ、無文胴部片1点が得られている。



2009-J 大学会館 1号館空調電源設備工事 (Fig.1・22)

調査地点 郡元団地 I-5 区

調査期間 2010年1月18日

調査担当 鹿児島市教育委員会 藤井大祐
埋蔵文化財調査室 中村直子

大学会館において配管埋設のため80cmの掘削を行なったが、攪乱層であった。同層より赤色顔料の塗布された土器小片1点が得られている。同時に建築工学科においても配管埋設のための掘削があり、80cmを掘削し、4枚の層が確認された。4層が河川氾濫原の砂層と考えられた。遺物は得られていない。

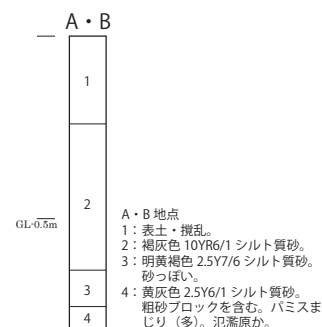


Fig.22 2009-J 柱状図

2009-K 中央食堂他通信線路改修工事 (Fig.1)

調査地点 郡元団地 H-8 区

調査期間 2010年1月6日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
埋蔵文化財調査室 寒川朋枝

配管埋設工事のため、70～80cm深度で掘削を行なった。どちらも川砂層を確認し、河川堆積層である可能性が示唆された。B地点攪乱層で土器小片1点が得られている。南北トレンチ部は60～75cm深度で掘削したが、攪乱層であった。遺物も得られていない。

2009-L 応用化学工学科 1号棟改修その他工事 (Fig.1・23)

調査地点 郡元団地 I・J-10・11 区

調査期間 2010年3月2日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
埋蔵文化財調査室 中村直子

工学部管理棟の一部を取り壊し、その建物の基礎間に包含層が残存するか否かを3か所で確認した。A地点は170cm深度で攪乱であったが、同層から無文土器肩部片1点が確認された。B地点では140cm掘削し、6枚の層を確認した。C地点では140cm掘削し、B地点でいう1～4・6層を確認した。B・C地点では遺物は得られていない。

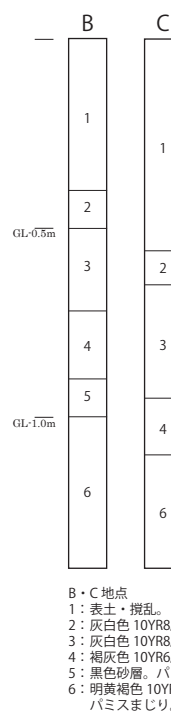


Fig.23 2009-L 柱状図

2009-M ボイラー棟等とりこわし工事 (Fig.1)

調査地点 郡元団地 G・H-8 区

調査期間 2010年3月2日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
埋蔵文化財調査室 中村直子

ボイラー棟の基礎を撤去するにあたり、基礎間における包含層の確認調査を行なった。200cmまで掘削したが、農学部1号館建物に接した周辺で、電気配管工事に伴い立会調査を行なった。M1地点は地表下60cm深、M2地点は115cm深まで攪乱であった。黄白色土層は情報処理センター調査²⁾の7層に相当し、古墳時代～古代の水田層と推定されている(PL.31)。遺物は得られていない。

2009-N 共通教育棟 3号館改修その他工事 (追加) (Fig.1・24・25)

調査地点 郡元団地 K・L-7・8 区

調査期間 2010年1月12・19日

調査担当 鹿児島市教育委員会 赤井文人・藤井大祐

埋蔵文化財調査室 新里貴之

外灯設置部分では、5か所の掘削を行なった。①地点では135cm深度で掘削し、5枚の層が確認された。2～5層の様相が水田層に類似するが乾燥しパサついており、水田層であるとは確言できない。表土層より中世竜泉窯系青磁片が出土している (Fig.25-48, PL.39)。②・④地点は攪乱が深く、①地点でいう4層が確認できたのみであった。③地点 (140cm深)・⑤地点 (130cm深) は攪乱であった。表土からは近現代の茶碗1点が得られている。排土中より近現代のガラス瓶・陶器などが得られている。青色透明の八角柱状のガラス瓶は、側面に「■■製」・「■薬」・「■■ ENSARY」・「■■ KYOSHISEIDO」のエンボスがある。三井資生堂 (中田資生堂) の胃痛・気付け薬「神薬」と考えられる。明治20～40年代にかけて販売されていた可能性が高い³⁾ (Fig.25-49, PL.39)。胴のやや開く円筒形の磁器は、外底面に「實用新案特許・第三五七二三號・玉穂」とあり、その登録番号で調査したところ、大正4年に「鶯壺」として実用新案登録された徳利の可能性がでてきた⁴⁾。この徳利は内部に空隙をもつ仕切りがあり、液体を注ぐ、卓等に置くななどの際に空気が抜け、小鳥の囀りのような音響がでたものという。しかしながら、内底面に仕切りの痕跡がみられない点、名称が「鶯壺」と異なる点、「実用新案特許」という正式名称を用いていない点などにより、確定したとは言い難い (Fig.25-50, PL.39)。

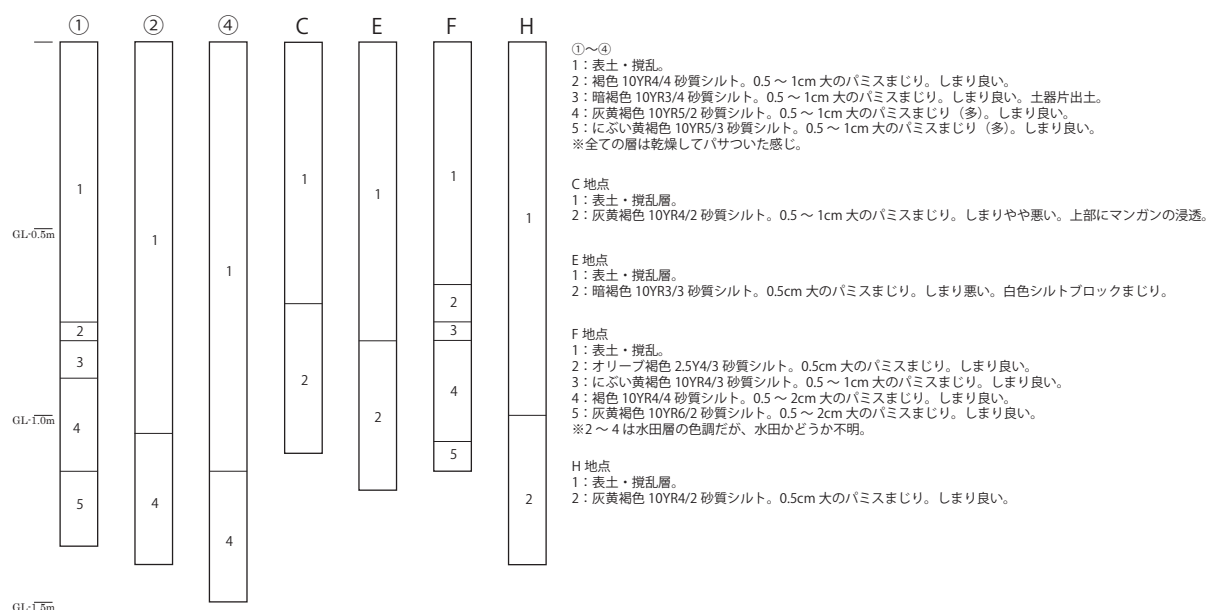


Fig.24 2009-N 柱状図

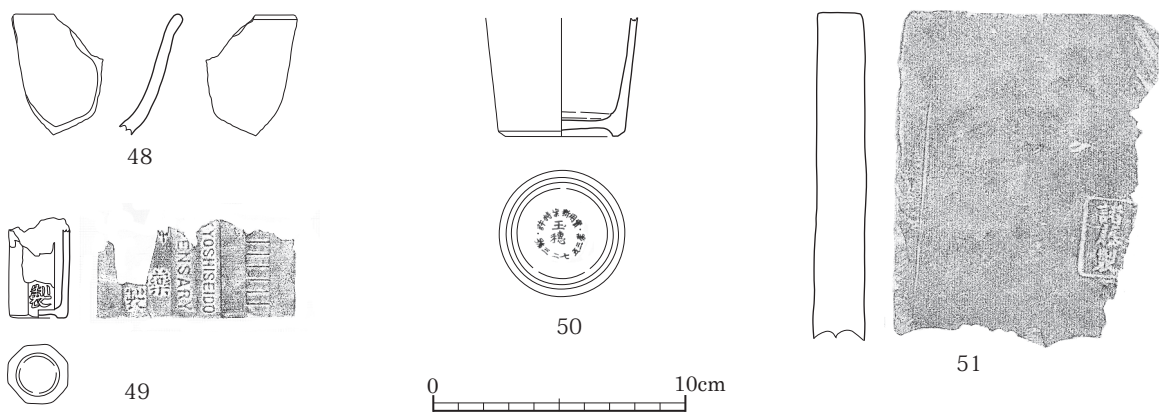


Fig.25 2009-N 遺物 (S=1/3)

共通教育棟3号館南側において、駐車場よう壁設置（F～H地点）・樹木移植部分（A～E地点）の掘削を行なった。A地点（70cm深）・B地点（100cm深）・D地点（90cm深）・G地点（170cm深）で攪乱であった。G地点は攪乱層から「諸藤製」と刻印を施した平瓦が得られている（Fig.25-51, PL.39）。近代以降のものであろう。F地点では5枚の層が確認された。水田層にも思われたが、確言できない。

2009-O 外灯設備工事 (Fig.2)

調査地点 桜ヶ丘団地 F・G-9・10区

調査期間 2010年2月18日

調査担当 鹿児島市教育委員会 岩戸孝夫
埋蔵文化財調査室 中村直子

外灯新設・取り替え工事のうち、3か所を対象に調査を行なった。②・③地点ともに130cm深度で攪乱であり、遺物も得られていない。④地点は140cm深度で掘削し、AT火山灰の二次堆積層が確認された。

2009-P 外灯設備工事 (Fig.1)

調査地点 郡元団地 K-11区

調査期間 2010年2月17日

調査担当 埋蔵文化財調査室 中村直子

既存の外灯を撤去し、深外灯設置のため140cmの深度で掘削を行なったが、攪乱層であり、遺物も得られなかった。

2009-Q ボイラー棟等とりこわし工事 (追加) (Fig.1)

調査地点 郡元団地 G-5区

調査期間 2010年3月17日

調査担当 鹿児島市教育委員会 赤井文人
埋蔵文化財調査室 寒川朋枝

基礎の撤去作業に伴って調査を行なったが、A・B地点で60～90cm深度まで攪乱であった。表土より近現代の磁器が得られている。

まとめ

平成21（2009）年度立会調査は、理・工学部域が多かった。土層は良好に確認できたところが多いものの、遺物はさほど得られていない。かつて水田地帯であることに起因すると思われる。

最も遺物が得られたのは2009-C地点であり、法文学部・理学部等で確認される弥生～古墳時代集落跡の遺物包含層上部にびっしりと遺物が張り付くように出土する場所が、教育学部でも確認できたことになる。また、同地点では南九州古墳時代の伝統的土器である成川式土器と古代の土師器・須恵器が4層上面に張り付くような形で出土している。

器種別に検討すると（Fig.26）、成川式土器が煮沸具である甕、貯蔵具である壺、供膳具である高坏・鉢などで構成されるのに対し、須恵器は煮沸具が欠落し、貯蔵具である甕・壺類、供膳具である坏・皿で構成される。土師器は坏・碗・鉢の供膳具のみで構成される。土師器の組成には、本来、最も破損率が高かったと類推される煮沸具の土師甕が、全く確認できなかった。

須恵器の坏、坏蓋の型式から考えて、8世紀後半の資料が主体であることから、土師器もまた同様の時期であると考えら

	煮沸具	貯蔵具	供膳具
成川式土器 n=145	甕 66.9% (97点)	壺 20% (29点)	高坏 2.8% (4点) 鉢 10.3% (15点)
須恵器 n=84	甕・壺類 59.5% (50点)	甕 28.6% (24点)	坏 7.1% (6点) 皿 4.8% (4点)
土師器 n=22	坏 72.7% (16点)	碗 18.2% (4点)	鉢 9.1% (2点)

Fig.26 2009-C 遺物：器種組成

れる。近年では成川式土器様式の最終型式である笹貫式土器が8世紀までは存続する可能性が指摘されている⁵⁾。同地点の調査が排水溝工事の小規模な調査であることから器種が偏った可能性も否定できないものの、直截に煮沸具の出土状況から判断すれば、成川式土器と須恵器・土師器が時期差によるものではなく、器種を補填しながら様式として存在していた可能性も示唆される。鹿児島市域の一部では8世紀後半のある段階まで、煮沸具の土師甕を製作していない可能性もあるのかもしれない。

また、須恵器の蓋の出土状況も坏・椀・皿に対してやや多く、この偏りが蓋のみ流通していることを示唆している可能性もあるが、今回、転用硯とみられるものは1点のみの出土であったため、この現象に言及することができなかった。いずれにせよ同地点は、構内遺跡郡元団地においても数少ない古代の資料を包蔵している重要な場所である。今後の工事においては慎重な対応が必要である。

註

- 1) 中村直子(編) 2005『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』19 鹿児島大学埋蔵文化財調査室 36-44頁。
- 2) 中村直子(編) 2006『鹿児島大学構内遺跡郡元団地 H-9区』鹿児島大学埋蔵文化財調査室
- 3) ボトルシアター庄司氏のご教示によれば、室町資生堂の可能性もあり、元々霊験あらたかな万能薬として販売され、胃腸薬・清涼剤的な性格をもつのは、地方の置薬として処方が変わってからだということである。
- 4) 独立行政法人工業所有権情報・研修館よりご教示を受けた。
- 5) 中村直子 2008「7・8世紀の成川式土器」『南の縄文・地域文化論考』南九州縄文研究会・新東晃一代表選歴記念論文集刊行会 119-128頁。

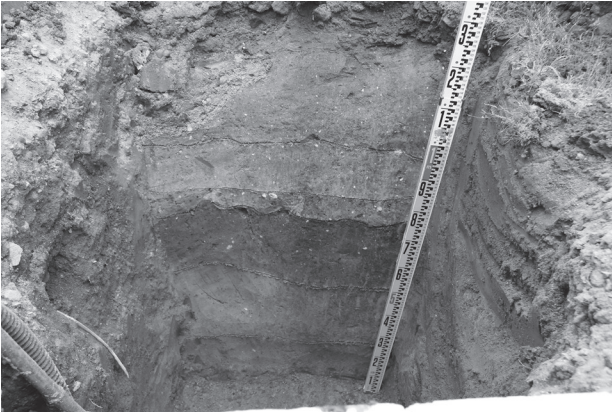
Tab.3 立会調査遺物観察

No.	コード名	地点	層位	時期	種別	型式・器種	部位	調整		色調	混和材	備考
								外	内			
1	2009-A	④	3	弥生	土器	壺?	底	ナデ,指頭痕	ナデ,指頭痕	外:橙5YR6/6・淡橙5YR8/3, 肉:黒N2/,内:褐灰5YR4/1	粗砂:角閃石・石英・白色粒	平底,底径(6cm)
2	2009-A	仮d	1	弥生	土器	山ノ口式小甕	口	横ナデ	横ナデ,指頭痕	内外:にぶい橙5YR7/4・灰褐5YR5/2	礫:橙色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒	
3	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	蓋	摘	指頭痕	—	外・肉:灰白2.5Y7/1	粗砂:白色粒,細砂:黒色粒・白色粒	径2.6cm
4	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	蓋	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:浅黄橙10YR8/3	粗砂:角閃石・石英	酸化焙焼成(赤焼)
5	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	蓋	口	回転ケズリ・回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:灰白5Y7/1	粗砂:白色粒,細砂:黒色粒・白色粒	8c後半,ほぼ完形,口径16cm
6	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	蓋	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:灰N6/1に類似	粗砂:石英,細砂:黒色粒	口径(16cm)
7	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	蓋	口	回転ケズリ・回転ナデ	回転ナデ・特殊ナデ	外:にぶい褐7.5YR6/3・灰黄2.5YR7/2,肉:にぶい黄橙10YR7/3,内:灰黄2.5Y7/2	礫:白色粒・赤色粒,細砂:石英・黒色粒	転用硯,わずかに墨らしきもの残存,8c後半,口径(18cm)
8	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	坏	口~底	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:灰N6/1に類似,自然釉:暗灰N3/1に類似	細砂:黒色粒	外面:自然釉,8c後半,口径(10.4cm)
9	2009-C		4上	古代	須恵器	坏	底	横ナデ	回転ナデ	内外・肉:灰10Y6/1	礫:黒色粒,粗砂:黒色粒・白色粒	8c末~9c前半,底径(9.2cm)
10	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	坏?	口	回転ナデ	回転ナデ	外・肉:灰白N7/1に類似,自然釉:暗オリブ灰2.5GY3/1,内:灰N5/1に類似	粗砂:石英,細砂:黒色粒	外面:自然釉
11	2009-C	西	4	古代	須恵器	坏	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:灰白5Y7/1	細砂:黒色粒・白色粒	
12	2009-C	西2	4上	古墳	須恵器	坏	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:黄灰2.5Y5/1に類似	細砂:黒色粒	外面:自然釉
13	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	皿	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:灰10Y6/1に類似	粗砂:白色粒・石英	
14	2009-C	土器溜	4上	古代	須恵器	皿	口	回転ナデ	回転ナデ	外(釉):灰オリブ7.5YR4/2,肉:灰白5Y8/1,内:にぶい褐7.5YR5/4	粗砂:黒色粒・石英,細砂:黒色粒	外面:自然釉,内面:口唇部に重ね焼きらしき痕跡あり
15	2009-C	西	4上	古代	須恵器	甕	頸	ヘラナデ	上:横ナデ,下同心円文当具	内外・肉:黄灰2.5Y6/1	粗砂:石英・黒色粒・白色粒	外面:自然釉
16	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	甕か壺	胴	格子文タタキ	平行文当具	内外:浅黄橙10YR8/3,肉:灰5Y6/1	礫:石英,粗砂:石英・黒色粒	
17	2009-C	土器溜	4上	古代	須恵器	甕か壺	底?	平行文タタキ→ナデ	同心円文当具	外(釉):にぶい黄橙10YR7/2,肉・内:灰N5/1に類似	なし	外面:自然釉
18	2009-C	西3	4上	古代	須恵器	甕か壺	胴	格子文タタキ	平行文当具	外:にぶい褐7.5YR5/3,肉・内:浅黄2.5Y7/3	礫:白色粒,粗砂:白色粒・赤色粒	

IV 立会調査

19	2009-C	西3	4上	古代	須恵器 甕	口～胴	平行文タタキ	同心円文当具	内外・肉:にぶい橙7.5YR7/4・7/3・橙7.5YR7/6・にぶい黄橙10YR7/3	礫:赤色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒・赤色粒	酸化焙焼成(赤焼)
20	2009-C	西1	4上	古墳	須恵器 甕	頸	横ナデ	横ナデ	外・肉:灰白N7/に類似,内(軸):灰黄2.5Y6/2	粗砂・細砂:白色粒・黒色粒	内面:自然釉,斜位の刺突文,二条の浅い凹線
21	2009-C	土器溜	4上	古代?	須恵器 不明	胴	ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	外・肉:灰5Y6/1,内(軸):灰オリーブ5Y6/2	粗砂:石英・黒色粒	内面:自然釉
22	2009-C	西3	4上	古代	土師器 环	口～底	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:橙7.5YR7/6	礫:赤色粒,粗砂:赤色粒・石英・白色粒・黒色粒	
23	2009-C	西3	4上	古代	土師器 环	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:橙7.5YR7/6	礫:白色粒,粗砂:赤色粒・黒色粒・白色粒	口径(12.4cm)
24	2009-C	西3	4上	古代	土師器 环	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:橙5YR6/6	礫:白色粒,粗砂:角閃石・黒色粒・白色粒	
25	2009-C	西	4	古代	土師器 环	口	回転ナデ	回転ナデ	内外・肉:浅黄橙7.5YR8/6	細砂:黒色粒・白色粒・赤色粒	
26	2009-C		4上	古代	土師器 环?	底	ナデ	回転ナデ	外・肉:浅黄橙7.5YR8/4,内:浅黄橙10YR8/3	細砂:黒色粒・白色粒	ヘラ切底,底径(7.8cm)
27	2009-C	土器溜	4上	古代	土師器 鉢	底	ヘラナデ→ナデ	回転ナデ	外:褐灰7.5YR4/1,内・肉:黄橙7.5YR7/8	礫:赤色粒,粗砂:赤色粒・石英・白色粒・黒色粒	底径(12.6cm)
28	2009-C	土器溜	4上	古代	土師器 鉢	底	ミガキ	ヘラナデ→ナデ	外:橙2.5YR6/6・灰黄褐10YR4/2,肉・内:浅黄橙10YR8/3	粗砂:石英,細砂:黒色粒・赤色粒・白色粒	底径(11.6cm)
29	2009-C	西2	4	古墳	土器 篋貫式甕	口	横ナデ	横ナデ	外:黒N2/,肉:褐灰10YR6/1,内:にぶい黄橙10YR7/3	粗砂:石英・白色粒・黒色粒	外面:煤付着
30	2009-C	西1	4上	古墳	土器 篋貫式甕	口	横ナデ	斜ハケメ→ナデ	外:灰黄2.5Y6/2,肉・内:にぶい黄橙10YR7/4	粗砂:角閃石・石英・白色粒	
31	2009-C	南	4	古墳	土器 成川式甕	突帯	ナデ	ナデ	外:黒褐10YR3/1,内:にぶい黄橙10YR7/2,内:にぶい橙7.5YR7/4	礫:黒色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒	一条絡状突帯
32	2009-C	南	4	古墳	土器 成川式甕	突帯	横ナデ	横ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4,内:赤橙10R6/6,内:にぶい黄橙10YR6/3	礫:赤色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒	低平な一条突帯
33	2009-C	内	1	古墳	土器 成川式高环?	脚	横ナデ	ナデ	内外・肉:にぶい橙5YR7/4	粗砂:角閃石・石英・白色粒	
34	2009-C	西2	4	古墳	土器 篋貫式甕	脚	横ハケメ→横ナデ	横ハケメ→横ナデ	外:にぶい黄橙10YR6/4,内:にぶい黄橙10YR7/3に類似,内:暗灰黄2.5Y5/2	礫:白色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒	底径(12.8cm)
35	2009-C	土器溜	4上	弥生	土器 山ノ口式壺	口	横ナデ	横ナデ	外:にぶい橙7.5YR7/3,内:褐灰10YR5/1,内:にぶい黄褐10YR5/4	礫:石英,粗砂:石英・角閃石・赤色粒・白色粒	内面:口縁直下に一条突帯
36	2009-C	南	4上	弥生	土器 壺	突帯	横ナデ	荒れのため不明	内外・肉:灰黄褐10YR5/2	粗砂:角閃石・石英・白色粒	二条突帯(同時刻み)
37	2009-C	西2	4	古墳	土器 篋貫式壺	突帯	横ナデ	荒れのため不明	内外・肉:にぶい橙7.5YR6/4	礫:石英・赤色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒	
38	2009-C	土器溜	4上	古代	土器 壺?	肩	横・斜ヘラナデ→ナデ	ナデ,指頭痕	外:黒N2/,肉・内:灰白2.5Y7/1	礫:角閃石,粗砂:石英・角閃石・白色粒	
39	2009-C	西2	4上	古墳	土器 埴?	口	ミガキ	ナデ	外・内:橙7.5YR7/6,外(顔料):明赤褐2.5YR5/6	粗砂:角閃石・石英・白色粒・黒色粒	外面:赤色顔料
40	2009-C	南	4	古墳?	土器 高环?	脚	縦ミガキ	ナデ	外:浅黄橙10YR8/4,内・肉:浅黄橙10YR8/3	粗砂:石英・黒色粒・赤色粒	
41	2009-C	土器溜	4上	古墳	土器 成川式高环	脚	荒れのため不明	荒れのため不明	外:浅黄橙7.5YR8/4,内:褐灰10YR6/1,内:灰白2.5Y8/2	粗砂:白色粒・黒色粒	外面:赤色顔料
42	2009-C	西2	4	古墳	土器 成川式高环	脚	縦ミガキ	—	外(顔料):赤10R5/6,肉:にぶい黄橙10YR7/3	粗砂・細砂:石英・黒色粒	赤色顔料
43	2009-C	内	1	古墳	土器 成川式高环?	脚	横ハケメ→横ナデ	横ナデ	外:にぶい黄橙10YR7/4,内・肉:にぶい橙5YR6/4	礫:茶色粒,粗砂:角閃石・石英・白色粒	底径(12cm)
44	2009-C	西1	4	古墳	土器 高环?	脚	横ハケメ・ミガキ	横ハケメ・ミガキ	外:にぶい橙7.5YR6/4・褐灰10YR4/1,肉・内:にぶい橙7.5YR6/4	粗砂:角閃石・石英・白色粒	
45	2009-C	西	4上	近現代	染付 碗	口	—	—	素地:白,圈線:群青,釉:透明	なし	口径(10.8cm)
46	2009-F	No.7	4	古墳	土器 篋貫式高环	口	横ミガキ	横ミガキ	内・肉:浅黄橙10YR8/6,外(顔料):赤10R5/8	礫:白色粒,粗砂・細砂:角閃石・石英・白色粒	外面:赤色顔料,口径(20.6cm)
47	2009-F	No.7	4	古墳	土器 成川式壺	底	縦ヘラナデ・ヘラ削り	縦ヘラ削り→縦ナデ	内外:浅黄橙10YR8/4・褐灰10YR4/1,肉:暗灰N3/	粗砂:角閃石・石英・白色粒	丸底
48	2009-N	①	1	中世	青磁 碗	口	—	—	素地:灰白N8/,釉:オリーブ灰10Y6/2	細砂:黒色粒	竜泉窯系:14c後半～15c半ば
49	2009-N		1	近現代	ガラス 薬瓶	底	—	—	群青透明	—	上底,側面「・製」,「・薬」,「・ENSARY」,「・・KYOSHISEIDO」,底径2.4cm
50	2009-N		1	近現代	白磁 薬瓶	底	畳付:釉剥ぎ	—	素地:白,釉:透明	—	上底,底面「實用新案特許・第三五七二三號・玉穂」,底径4.5cm
51	2009-N	G	1	近現代	土器 平瓦	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	内外肉:灰N4/・灰N6/	なし	刻印「諸藤製」

IV 立会調査



PL.18 2009-A a ①地点



PL.19 2009-A ⑥地点



PL.20 2009-C 土器溜り地点



PL.21 2009-C 須恵器出土状況



PL.22 2009-C 須恵器出土状況



PL.23 2009-C 土器溜り

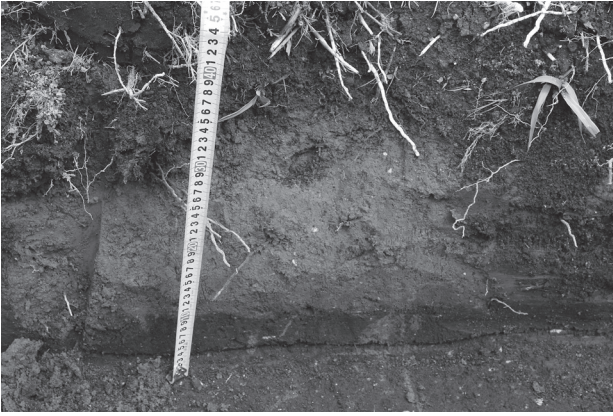


PL.24 2009-C ①地点

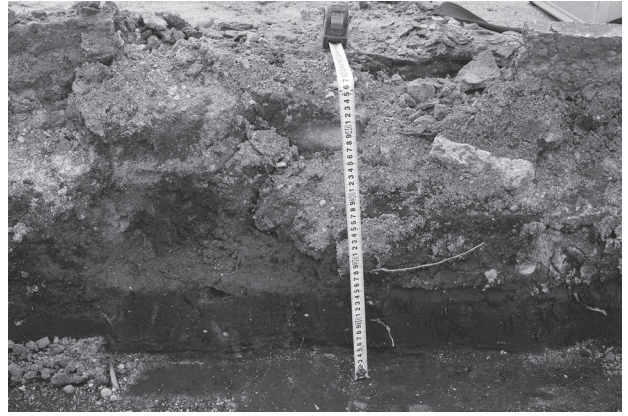


PL.25 2009-C ②地点

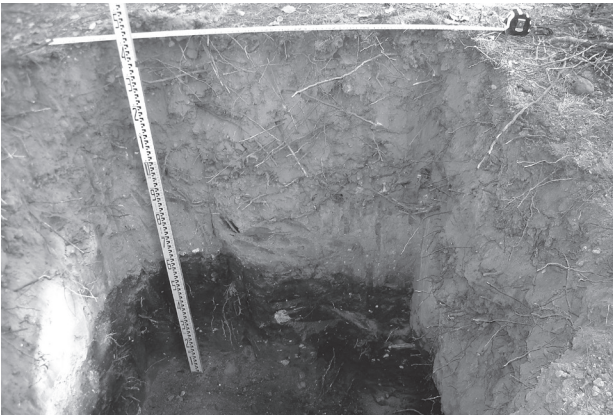
IV 立会調査



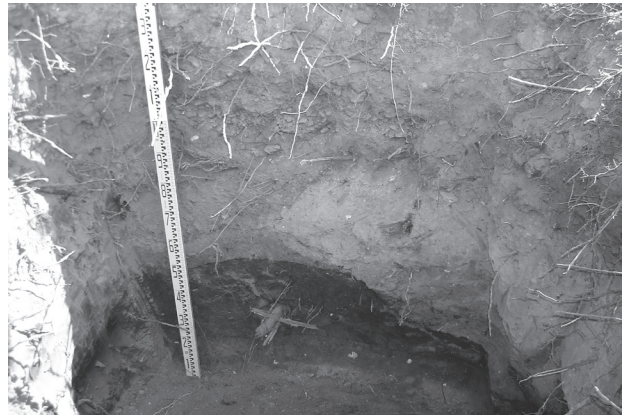
PL.26 2009-C ③地点



PL.27 2009-C ④地点



PL.28 2009-F No.7 地点



PL.29 2009-F No.8 地点



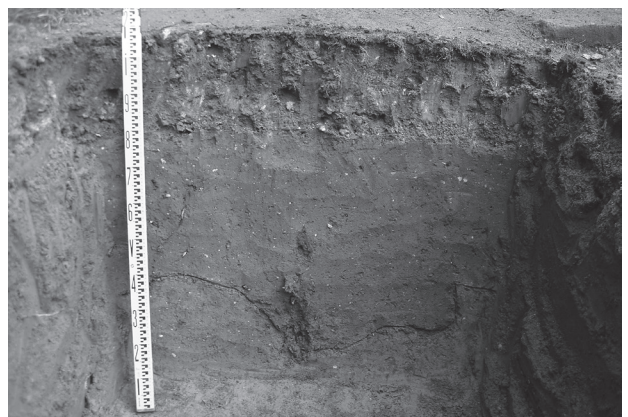
PL.30 2009-L C 地点



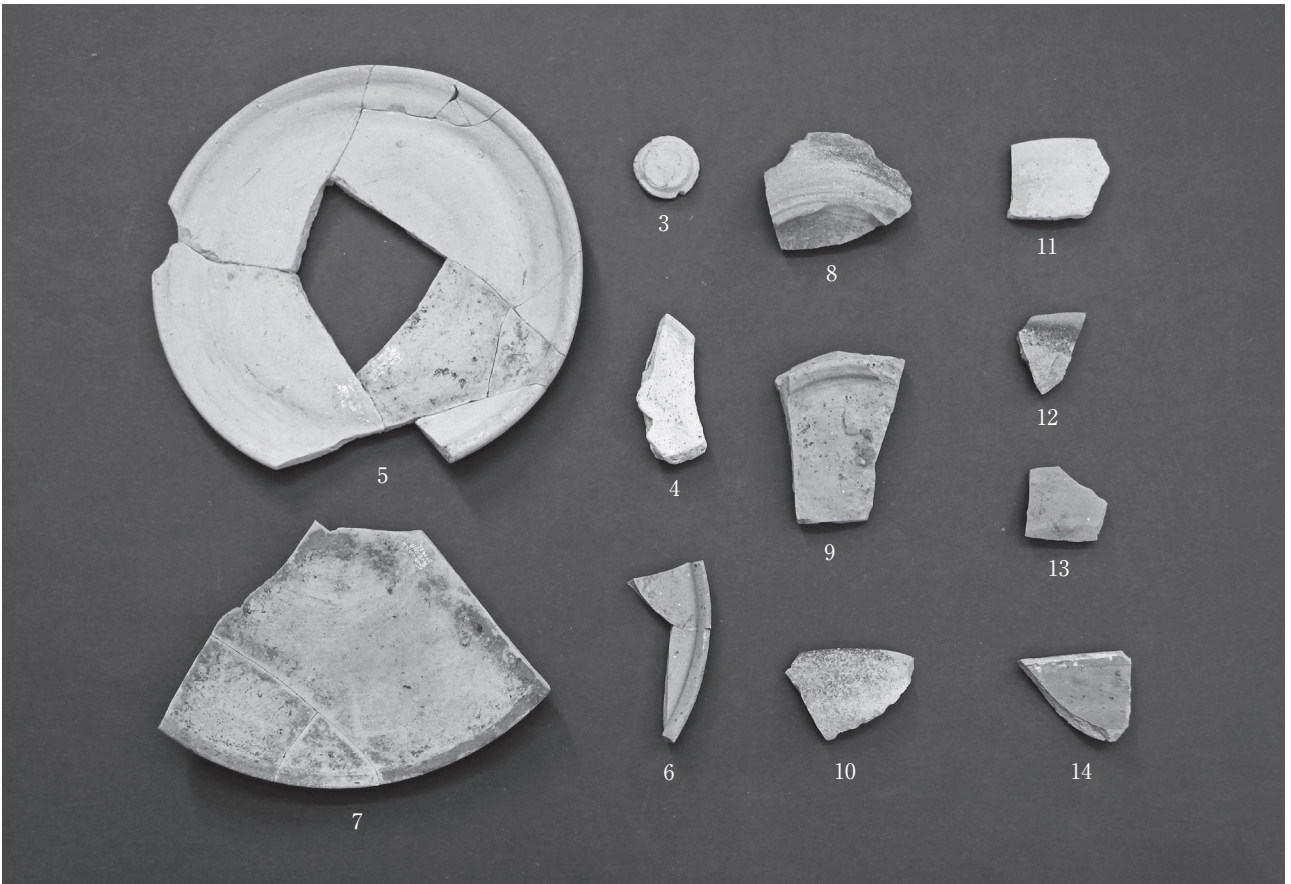
PL.31 2009-M M2 地点



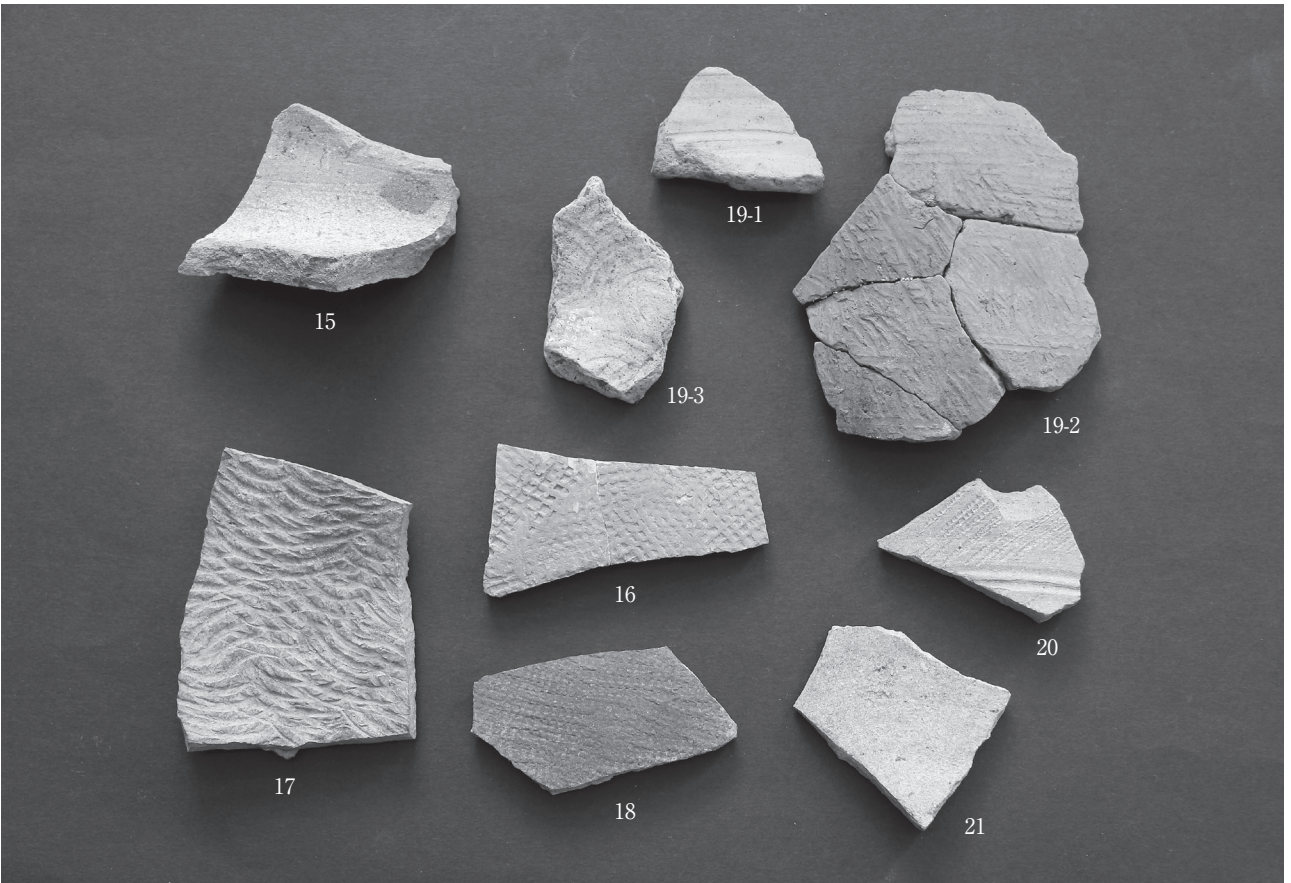
PL.32 2009-N ①地点



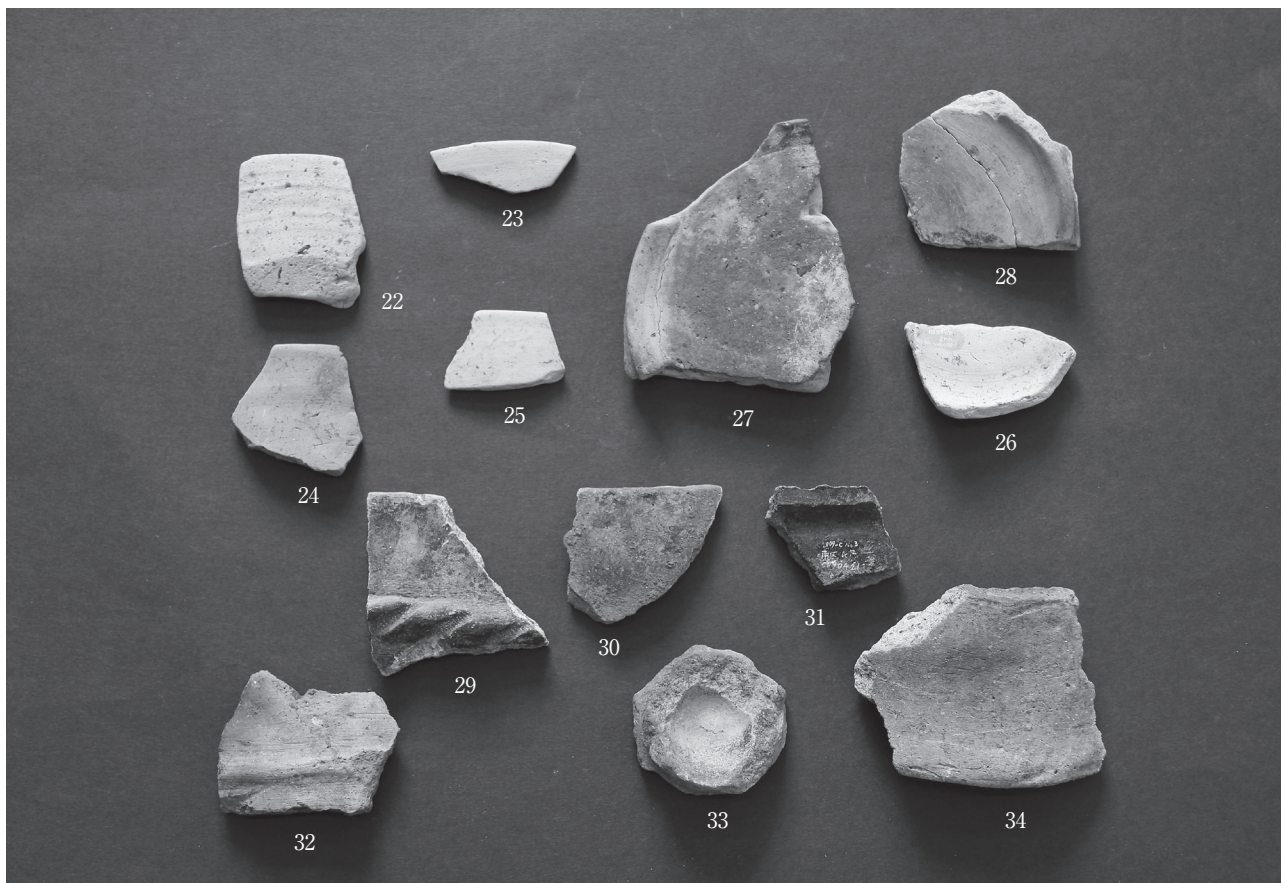
PL.33 2009-N C 地点



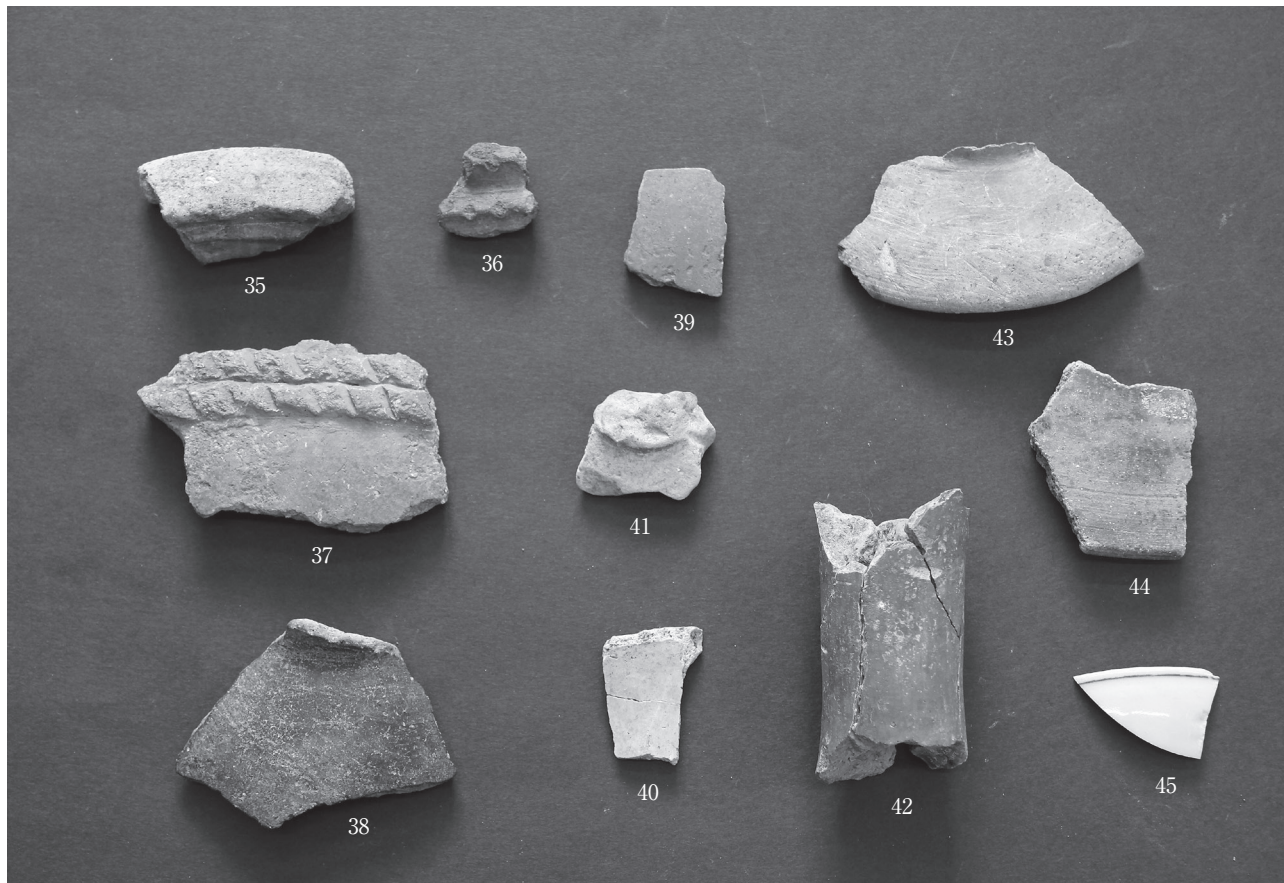
PL.34 2009-C 出土須恵器 1



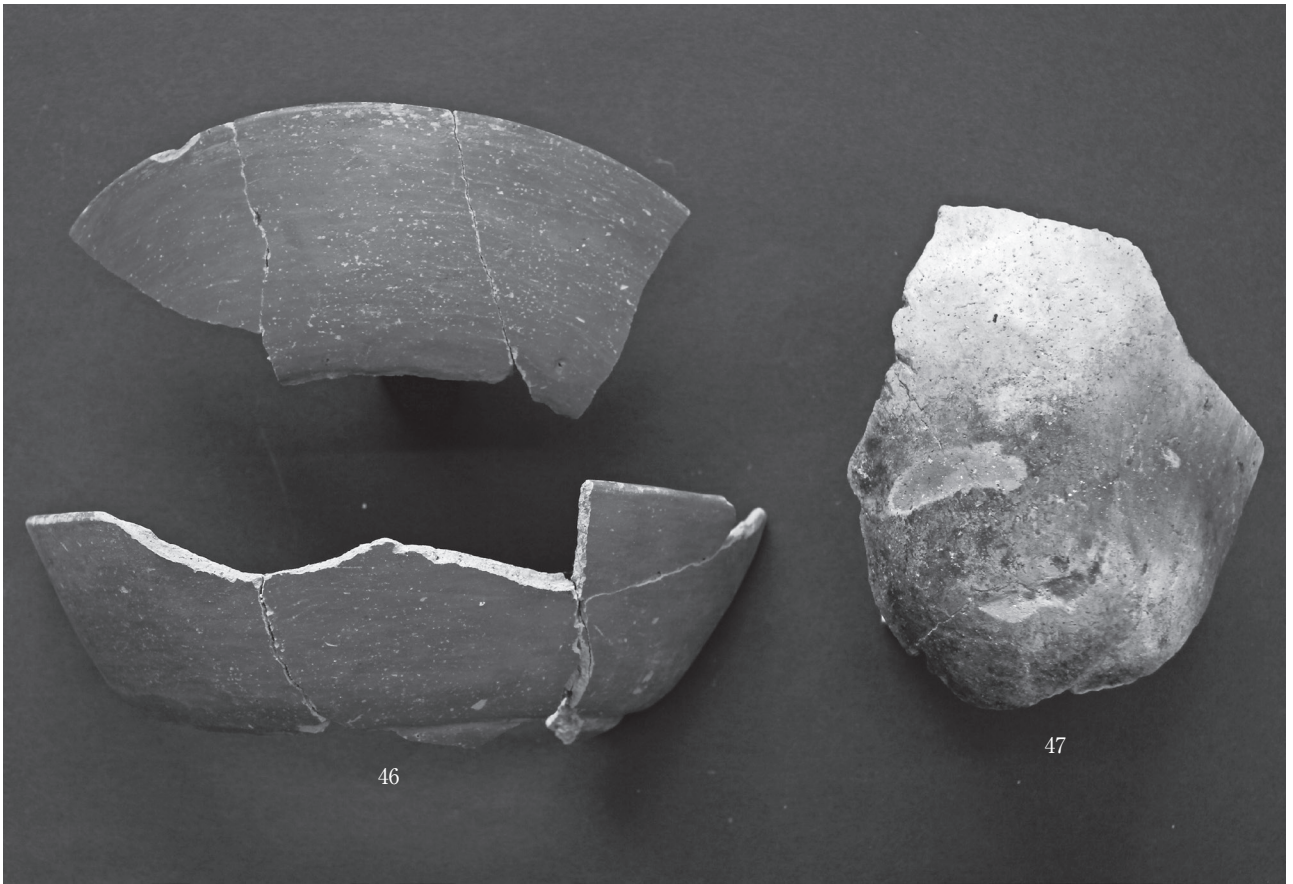
PL.35 2009-C 出土須恵器 1



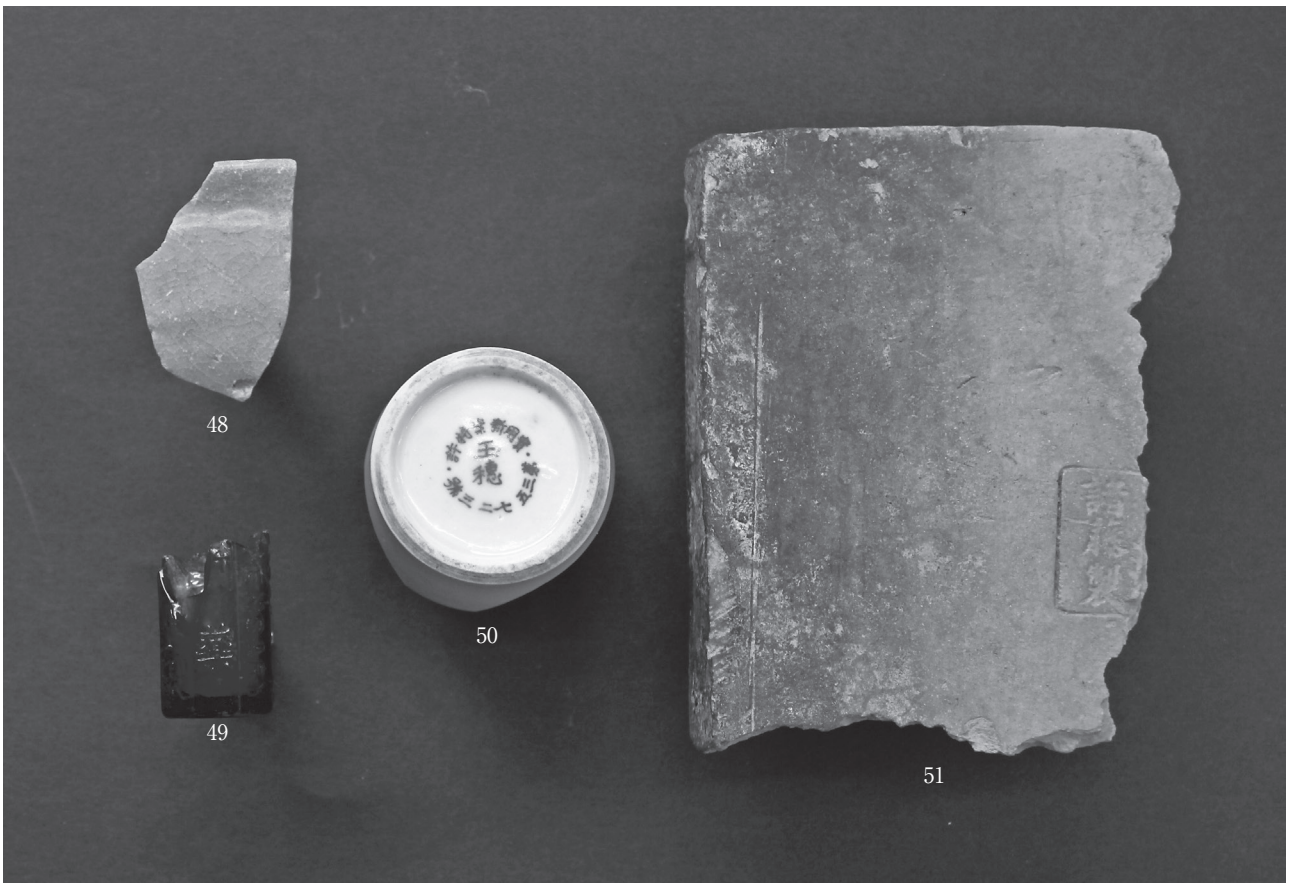
PL.36 2009-C 出土土師器・土器



PL.37 2009-C 出土土器・磁器



PL.38 2009-F 出土土器



PL.39 2009-N 出土磁器・ガラス製品・瓦

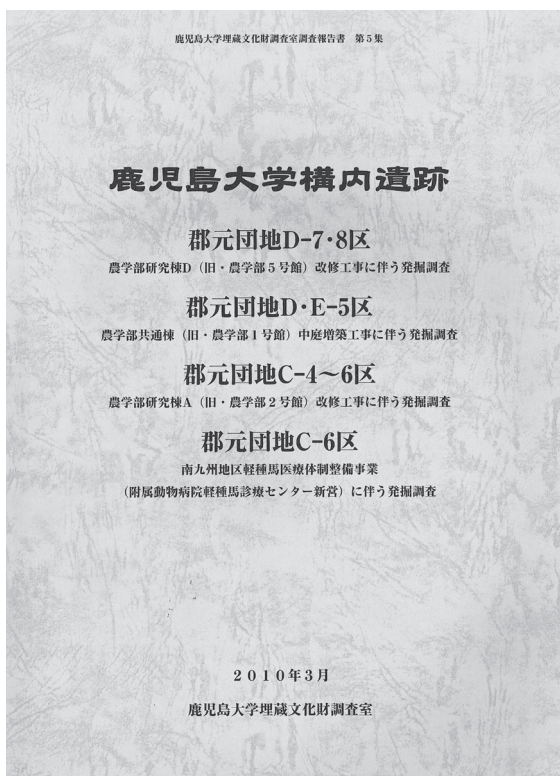
V 遺物整理

平成 21（2009）年度の報告書第 5 集の掲載遺物である平成 17・18 年度農学部 PFI 事業関係発掘調査（2005-4・2006-2・2006-4）ならびに、平成 19 年度南九州軽種馬医療体制整備事業工事に伴う発掘調査（2007-4）遺物の実測・トレース、平成 22 年度報告書刊行予定である、昭和 50 年度釘田第 1 地点発掘調査（1975-1）の遺物実測を、昨年度から引き続き行なった。また、平成 21（2009）年度の年報 24 掲載遺物である、平成 20 年度立会調査遺物（2008-A～N）の洗浄・注記・実測・トレースを行なった。

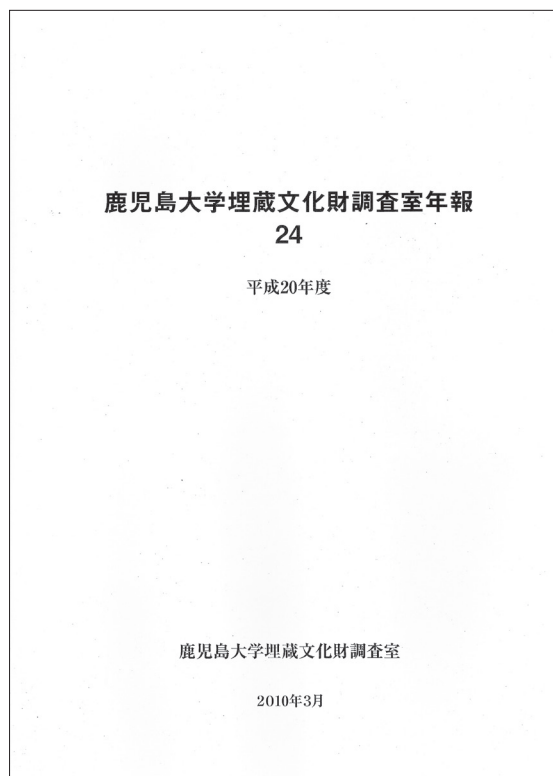
平成 22 年度刊行予定である、平成 21 年度立会調査（2009-C の一部）遺物の洗浄・注記を、平成 19 年度共通教育棟 2 号館改修工事に伴う発掘調査（2007-2）遺物の洗浄を実施した。

VI 刊行物

平成 17・18・19 年度発掘調査報告（2005-4・2006-2・2006-4・2007-4）を掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査報告書 第 5 集」ならびに平成 20 年度の発掘調査概要報告（2008-1）、試掘調査報告（2008-2）、立会調査報告（2008-A～N）を掲載した「鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 24」を刊行した。



PL.40 発掘調査報告書第 5 集



PL.41 年報 24

VII 遺物保管

毎年実施している遺物保管作業として、平成 21（2009）年 4 月 14 日に遺物収蔵状況確認を 10 か所（総合研究博物館は除く）で行なった。また、工・実験工場、理工・廃液処理室に保管してある木製品保管水槽の水替えを平成 22（2010）年 2 月 22～25 日の期間で行なった。

そのほか、校舎改修工事によって保管収蔵場所を移動するよう指示があり、平成 21（2009）年 5 月 10～11 日に理工：共通教育棟から理工：共通教育棟プレハブへ遺物・サンプリング土の移動を行なった。

VII その他の事業

1 公開講座

平成 21 (2009) 年 8 月 8 日, 総合教育研究棟において『原始古代の南島墓』というテーマで, 「種子島小浜遺跡発掘調査報告」, 「徳之島トマチン遺跡について」を講演した。約 30 名の参加者があった。



PL.42 公開講座



PL.43 公開講座参加者

2 博物館実習受入

平成 21 (2009) 年 8 月 24 日～9 月 4 日にかけて, 人文社会科学研究科大学院生 2 名ならびに 法文学部人文学科学生 3 名を受け入れた。

3 農学部開学 100 周年記念事業

平成 21 (2009) 年度は, 鹿児島大学農学部の前身である鹿児島高等農林学校が開校して 100 周年を迎え, 農学部において記念事業が実施された。平成 21 (2009) 年 11 月 14～16・21～23 日の間, 農学部敷地内より出土した遺物(弥生時代～現代)の展示を行ない, 「地中からみた農学部のあゆみ」と題したパンフレットを作成し, 配布した。展示室へは約 780 名の閲覧者があったため, アンケートも実施して, 鹿児島高等農林学校時代・鹿児島大学時代の遺物の情報を募ったが, 有力な情報はなかった。



PL.44 記念事業配布用パンフレット



PL.45 遺物展示

IX 平成 18～21（2006～2009）年度における自己評価報告

埋蔵文化財調査室では、平成 18 年度に「評価項目、評価基準及び点検項目」を定め、年度ごとに事業の点検を行っている。以下は、それに基づいた平成 18～21 年度の自己評価報告である。

埋蔵文化財業務

1 学内施設整備等工事と埋蔵文化財の手続きに関する事項

郡元キャンパス・桜ヶ丘キャンパスが周知の遺跡となっているため、施設整備事業において、文化財保護法に基づく埋蔵文化財への手続きが必要なものがある。埋蔵文化財調査室では、それらの諸手続きを行い、事業が与える埋蔵文化財への影響を推定し、鹿児島県教育委員会や鹿児島市教育委員会、学内工事担当部署との調整を行う。鹿児島県教育委員会によって必要と判断された事業については調査を実施する。

平成 18 年度には 38 件、平成 19 年度には 37 件、平成 20 年度に 21 件、平成 21 年度には 23 件の施設整備事業においてこれらの手続きを行った。

このうち調査を実施した分については、出土品に関する届出と、調査の概要報告の調査後半年以内の提出が義務付けられている。平成 18 年度には発掘調査 4 件、立会調査 20 件、平成 19 年度は発掘調査 4 件、立会調査 20 件、平成 20 年度は発掘調査 2 件、立会調査 10 件、平成 21 年度は発掘調査 4 件、立会調査 16 件について、これらの届出と報告を作成・提出した。埋蔵文化財の手続きについては滞りなく行われている。

2 埋蔵文化財調査に関する事項

埋蔵文化財調査については、迅速かつ適切な調査を目指している。発掘調査では平成 17 年度より民間会社による調査が導入されており、調査の指示や、適切な作業を実施しているかの点検が埋蔵文化財調査室担当者の重要な職務となっている。いずれの調査でも、調査には最低 1 名の教員が常駐し、細かい指示を行っている。

設備整備事業に伴う発掘調査の場合、遺跡は工事によって破壊されるため、発掘調査記録として保存されることになるが、写真・測量が主要な記録となる。記録については埋蔵文化財調査室の教員が担当する事を原則とし、適切な記録保存に努めている。

立会調査については鹿児島市教育委員会から調査員が派遣されるが、埋蔵文化財調査室では立会調査で得られるデータ収集のため、教員が同行する。立会調査についての報告は埋蔵文化財調査室が毎年刊行する『鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報』に掲載している。

発掘調査報告書については遺物整理作業が終了後、作成している。しかし、本学構内遺跡から出土する遺物量は膨大であり、ほぼ毎年複数件数の設備整備事業に伴う発掘調査を実施する必要があったため、整理作業員の人員不足から 19 件の未報告分が残っている。

このような事態を改善するため、平成 20 年度から整理作業費が予算措置された。これを受けて、平成 20 年度からは特任助教 1 名と非常勤職員 2 名を増員し、整理作業が常時進行できる体制を整えた。平成 22 年度末には未報告物件では最も古い、昭和 50 年実施の発掘調査「釘田第 1 地点」の発掘調査報告書を刊行予定である。

教育活動に関する事項

埋蔵文化財調査室の専任教員は共通教育や専門教育に非常勤講師として協力している。法文学部「考古学地域論」、人文社会科学部研究科「考古学地域特論」を担当のほか、共通教育「鹿児島探訪—考古—」を分担した。また、鹿児島国際大学大学院国際文化研究科でワークショップ「考古学と情報科学」等（各年度 1 回）を担当した。なお、考古学を専攻する学生への専門的な助言や発掘調査等の実技指導なども行っている。

平成 18 年度以降、博物館学芸員資格取得のため学外の博物館等で行われる実習の、受け入れ館実習日数の不足が生じた場合、それを補うため実習生の受け入れ指導を行っている。

研究

1 研究活動の成果に関する事項

専任教員による研究発表は平成 18 年度が 3 件、平成 19 年度が 2 件、平成 20 年度は 19 件、平成 21 年度は 13 件となっている。学術論文および学術報告書は平成 18 年度が 6 本、平成 19 年度は 9 本、平成 20 年度は 18 本、平成 21 年度が 17 本である。また、学会賞や文化賞の受賞は 4 件である。

2 研究にかかわる諸活動に関する事項

学会活動に関する活動については、平成 18 年度「日本文化財科学会」大会の開催実行委員会への参加、学会座長や論文査読などの活動実績がある。

3 研究資金の獲得に関する事項

競争的研究資金の獲得については、科学研究費については毎年、教員全員が申請している。代表者として、平成 18 年度「若手研究（B）」、平成 19 年度～平成 21 年度「若手研究（A）」各 1 件が採択され、分担者としては平成 19～21 年度「基盤研究（C）」2 件、平成 21～25 年度「新学術領域研究」1 件が採択されている。

社会貢献

1 地域社会への貢献に関する事項

学術的知識や技術等に対する支援および指導の活動としては、地方自治体等が行う発掘調査や出土品についての指導を行っている。平成 18 年度は 4 件、平成 19 年度が 3 件、平成 20 年度が 5 件、平成 21 年度が 5 件である。地方自治体等の審議会委員として、平成 18 年に 1 件、平成 19～21 年度に継続して 2 件活動している。

埋蔵文化財調査室が実施する発掘調査中や遺物整理作業では、学内の他、鹿児島国際大学や鹿児島女子短期大学の考古学関係授業に活用されている。

2 大学開放・情報公開に関する事項

発掘調査では埋蔵文化財調査室の事業として、遺跡見学会を実施し、一般市民に広く公開している。小・中学生を主な対象に体験発掘も実施している。なお発掘調査成果の公開方法として、ホームページでの情報公開の他、新聞投稿やマスコミへの情報発信も行っている。

国際交流

国際交流に関する事項としては、国際学会や国際会議等への参加、海外での資料調査、発掘調査の参加などを実施し、海外の研究者との交流をはかっている。

管理運営

1 管理運営の改善に関する事項

安全・衛生管理については、平成 17 年度に「発掘調査現場の安全・衛生管理の手引き」を作成しており、発掘調査および立会調査時にそれを遵守するよう努めている。発掘調査については民間発掘会社が現場の運営を行うため、その管理システムを用いている。

2 その他管理運営に関する事項

学内構内遺跡から出土した遺物は、現在各部局 10 か所に分散されて保管されている状況である。そのため毎年 1 回、管理状況の点検を行うとともに、遺物収納についての部局への周知を行っている。

鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報 25

2011年3月発行

編集・発行 鹿児島大学埋蔵文化財調査室

鹿児島市郡元一丁目 21-24

TEL 099-285-7270

印刷 斯文堂株式会社

鹿児島市南栄 2-12-6

TEL 099-268-8211

Kagoshima University

Research Center for Archaeology

Report Vol. 25

CONTENTS

Chapter

1	Report of archaeological research in fiscal year 2009	4
2	Outline of excavation at Area Q • R-8 • 9 and J-5 in Korimoto Campus	7
3	Report of test excavation at Area H • I-5 • 6 in Korimoto Campus	15
3	Report of rescue surveys 2009	17
4	Report of other jobs	34

Published by

Kagoshima University Research Center for Archaeology

2011